380.8
Y53
ウ

複写

0053392006

0053392-006

380. 8－Y53ウ

柳田国男先生著作集

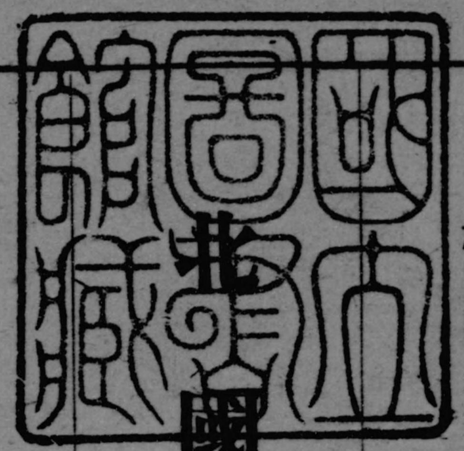
実業之日本社

第1－7冊

昭和22－24

AIA

IN-66
380.8
Y53
(6)



柳田國男先生著作集　第六册

紀行

實業之日本社

題簽　折口信

國立國書館
昭和 23.12.20
購入

自序

この日記に出て來るのは、半分以上は土地の人、他日同じ土地を又おとづれて行かぬ限り、もう再びは逢はれまいと、思ふやうな人ばかりであつた。さうして私の必ずあるいて見ようとして居た土地は、其頃はまだ無限に多かつたのである。僅かに名と處とのみを日記の上に留めて、それでいつまでも憶ひ出すことが出來るであらうと思つたのは、一つには彼等の風貌と動作、殊に言葉の力と味はひとが、深い印象を切り刻んだからであつたが、それにもまして自分などを安心させたのは、是が次々とくり返して、現はれて來るであらう地方の

型であり、やがては類別によつて覺えやすく、又解說しやすくなる時が、やつて來さうにも想像せられたからであつた。

都市の群居生活に於ては、斯ういふ人間の型の如きものが、しば〳〵心付かれることは事實であるが、こちらは廣々とした山野の旅に在つて、たまさかに行き觸れたる生活の片影に過ぎない。それが積もり重なつて人とは斯ういふものの、もしくは日本の田舍者は、大よそ此樣な癖と長處を持つと、言つてもよいやうには何時になつたらなれよう。人國記一流の著者ばかりを笑ふことは出來ない。私たちも實はさういふ空な夢を抱いて、まだ久しい間、旅の長路に行き疲れて居たのであつた。

斯邦の旅行史をふりかへつて見ると、さうした時代すらもあまり永くは續かなかつた。土地で荷持ちを賴み草鞋を一足讓つてもらつて、急に旅裝を改めて

山脈の向ふ側へ、越えて見るといふやうな事は今はもう望み難くなつた。家を出るときから重苦しい足ごしらへ、途中で用も足せぬやうな身なりをしないと山に登つて見ることも出來ぬ人たちばかりが、仲間をさそつてわや〳〵と僻村をあるき、其他の人々は大抵は口もとから引返すやうになつた。日本は珍らしく、峠路の多い國であつたのだが、便利がよくなつて却つて大部分が不用に歸してしまつた。山一重を隔てた二つの土地の消息は、まはりまはつてしか傳はつて來ず、まして雙方を比べて見ようとするやうな旅人は、もう稀々にも通つては行かない。今から考へると私などの時代は、前にも例が少なく、今は又遠く過ぎ去つて、ちようど中間の僅かな丁場であつたことが心付かれる。さうして山河風物のみはほゞ昔のまゝで、そこに安住して居た人だけが入れ替つて居るのである。日記を粗略にしかつけて置かなかつたことが、今となつては甚だ

心殘りである。

もちろんこの中には記憶がなほ鮮かに、其日の光景がほゝゑましいまでに、胸に浮ぶ場合も少しはあり、又は外山君の歌集の序のやうに、何か機緣があつて語り傳へたものも幾つかあるが、それを全體に亙つてやゝ詳かにしようとすると、自分にも精確を期しがたいので手を下す氣になれない。その上に世の中はもう既に全く變つて居る。個々の舊知の上にも豫想し得なかつた變化が起つて、その大半の事情は私の見聞の外である。今は單にかゝる現實が曾ては有り、今は既に四十年の昔に遠ざかつて居るといふことを、明かにし得たことを以て滿足するの他は無い。この點に關しては、自分も亦一箇の讀者である。

昭和二十三年八月

柳田國男

目次

自序……一
越後へ（明治四十年）……一
歌集「山さと」序文（昭和八年）……四五
北國紀行（明治四十二年）……五一
美濃越前往復（明治四十四年）……一七五

旅行の話その一（大正五年六年）……二三七
旅行の話その二（昭和二十二年）……二八五
索引……二九九

越後へ

明治四十年——

朝八時二十分上野發の汽車、車中福田庫文司と同行、新婦をつれて武藏本莊へ行くところ。

碓氷山中の桐島は、葉は少しも無くて花ばかり也。南の風吹渡り、滿山の竹樹皆動く。既に夏の意なり。鶯の聲谷を隔て、藤は喬木の梢に花さけり。輕井澤に來ると辛夷（こぶし）、八重の櫻なほ盛りなり。

坂城以北、若緑の山に躑躅まじり咲く。始めて此花の風情を解す。下水内に入りて柿の

若葉おもしろく、桐の花も多し。背後には妙高山の雪。

田口で待合せ二十分、去年來て休んだ櫻屋は障子を立てゝ森閑として居る。あたりは薄暮の水の音、蛙の聲。

八時になつて高田に著く。宿は清香園別邸といふ。郊外のいぶせき古屋ながら、庭は物さびて楓の花、梅の若葉もよし。田の蛙しきりに鳴く。

五月二十日　晴、夜雨

朝農學校を見に行く。校長菊池氏案内なり。茨城縣久慈郡の人といふ。次に稻田といふ處に、郡農會の試驗場を見に行く。場長鈴木氏は遠州の人、報德道に熱心なり、この二人の人に色々の話を聽く。

農學校は昨年まで郡立、新たに縣立となる。年經費僅かに一萬一千圓、內一割が國の補助。卒業生百名のうち、專賣官吏となるもの四十五、縣郡吏員三十四、他に小學校教員も若干、農作に就く者殆と無し。甲種農學校の普通學では、實は官吏となるに十分ならず、」

高等小學校を終へてすぐ來る者あり、二十四五歳にもなつて入る者多し。中學校に比べて希望者少なく、もとは教員たち勸誘にあるき、英語も教へるといふ言ひわけばかりに、一週三時間の英語科あれど効果は無し。其上に國語の時間などもありて、是では專門の教育は困難かと思はる。

講習會は盛んなる地方なり。長いのは十日間、一日きりのものもあり、婦人の講習もありて、何れも農事を教へる。昨年一年中にも講習は十個所以上、人員は六七百人、同じ人が二度三度、一大字から七八十人もつれ立つて來ることあり、五十以上の老人も出て來る。今では青年で一回以上の講習を受けぬ者殆と無くなるといふ。この傾向は大いに利用し得られるが、今は何分にも科目が複雜で時間が短い。長野縣との交易、こちらから行くものばかり多し。先づ米の可なり大量、魚類に重油、薪炭さへ輸出して居る。長野の方からは來るもの少なく、金で拂つて居る樣子也。元來新潟縣は自給の地方で、建築材の一部分を秋田から取るのと、鹽の出來ぬことなどを除けば、衣食住の必需品の爰にて產せぬもの無

し。縣下には河沼湖水の水面九十萬町歩餘あれども、養魚の事業などは少しも行はれず、此點著しく長野縣とはちがふが、それにも理由はあるといふ。つまり魚類の多いといふこと。

とか。高田は高田町と高城村とで出來て居る。村は士族町、それを三方から高田町が取圍んで居る。すべての官衙學校、新設の師團なども皆高城村の方に在り。町人と伍を爲すを欲せずといふ理由なれど、實は士族中に有力者無く、商人たちに支配されるのを厭ふ也。その士族も段々移住し去り、現存する者には產業に從事する者無く、多くは敎員や小役人のみ。其間に外から宅地を買つて入込む者、又官吏等の寄寓する者あり、寄寓者の村稅特に重し。師團の新設に際し、町の方では間接の利得を眼中に置くに反して、村民はたゞ地所を高く賣ることしか考へず。陸軍の方でも、練兵場をずつと遠くへもつて行くべしなどと謂つて牽制して居る。城址は舊藩主の私有から、一旦士族に讓與したれども、すぐに樹木を伐り去つて荒れ放題とし、橋を毀して木材を取り、土地は畠にしたのみならず、なほ之を他に賣らうとせし故、榊原氏は再び之を取上げ、單に無償の利用だけを許して居る。

維新の際にも無條件の明渡しを承諾しながら、後で建物に火をかけた者さへあつた。つまり人物が無いからだと評するのが通例なれど、是は教育の衰頽といふべきものなり。

高田附近の地主は、家のまはりに木を栽ゑること盛んなり。此木の大さにて家の古さを示さうとする風あり。尤も風強く雪の多いのも一つの説明ならんも、全く樹に圍まれざる家も無きに非ず、それにても住める也。とにかくに山には大きな山林も無きに拘らず、この爲に木材の供給は乏しからず、大家の零落する際には、先づ屋敷の木から賣つて行くといふ話。

土地の手入の悪いことは、此邊のやうなのも珍らし。少しく表土を掻きまはしたばかりで、深耕をせぬ故に、地力の衰へたるは一通りに非ず。杉菜が到る處に生えて居る。尤も甚だしい粘土質にて、少し雨が無いと起した土が固まる。それを槌のやうなもので叩いて崩して居る。田を打つ畠を打つといふ文字通り也。是も川砂などを僅か交へたら改良し得られると思ふのに、まだ之を試みる者は無きよし。田はすべて一毛作なるが如し。畠の小

作は勞多きを以て之を好まず。處によつては田を貸すを條件に强ひて畠を作らする地主もあり。畠の地價の安いのも理由がある。尤も此頃の季候でも、朝起きて見るに草の葉に露少なし。雨がやゝ乏しいと、畠作は何でも出來そこなふといふ。蔬菜が少なく、大根の生干を東京から輸入するなどゝいふのも怪しむに足らず。

午後講演。產業組合に就いて說く。是が今度の役目、縣農會との約束にて、其代りに何處をどう見てまはつてもよきなり。但し西頸城上流魚沼二郡、東蒲原郡を殘すことになつたのは心殘り也。けふはどうしたか聽衆百人に滿たず。演說も少々不出來なりき。

四時半に高田を立ち、汽車にて柏崎に向ふ。鉢崎あたりの海岸玫瑰多く咲けり。去年の北邊の旅を想ひ起す。又諏訪湖畔にても見たる紫の花も多し。未だ名を知らず。

鯨波柏崎の間などの田に、所々一間徑ばかりの圓形に土を圍ひ、そこばかり古株のまゝに耕さずに置くが目につく。是は肥料の流散を防ぐために、成るべく遲くまで肥土をそつとして置くなりといふ。或は雪中肥曳きの風習の名殘かもしれず。以前は田は春になつて打つたのが、近年仕事の都合にて、こゝだけ殘して早く打つて置くことになつたものか。

柏崎着。天野屋京兵衛方とまり。

五月二十一日、晴

午前中、縣から案內の相原瀞君と共に町を見物す。

柏崎中學校に行き參觀、校長と談る。十三學級生徒五百人、良き學校なり。

郡農會の試驗場を行きて見る。場長木田氏、石川縣の人。

富永君中村君あとより來る。

午後講話、六十人ほど、新聞記者筆記す。郡農會副會長內山氏に逢ふ。

富永君祖父は富永春部といふ。諸國郡鄕考の著者なり。存採叢書の中にて之を刊行す。

この本をもらふ約束をして、氏と爰で別る。

柏崎は古い都會、三國街道との追分、町の中ほどに在り、小賣店軒を連ぬるうちに、不思議に古道具屋多し。現在の繁榮は石油の爲なれど、以前は越後縮の產地として聞え、又

行商を多く出す處。中學生徒も實業志望多く、奬勵の結果やゝ軍人にもなつて居る。商業上の利害を一にする村、相接して三つあり。取引の上では柏崎を名のるも、課稅の關係からまだ一體となることが出來ず。

柏崎の漆器は木地も漆も、大方は外から取よせて造る。世間へは輪島といつて賣つて居る。しかし技術は精巧にして、少しも輪島の名聲を傷けるものでないといふ。

五時二十分の汽車にて柏崎を立ち小千谷に向ふ。塚山のトンネルある山には、紅い谷うつぎ咲き滿ち、藤も多し。來迎寺の驛についたのは六時二十分、名を知られたる土地の長老高橋九郎翁迎へに出て來られる。

人力車で小千谷へ三里、暗くなつて著く。電燈はあれども光弱く淋しい町、物みな古し。久しく火災を免れたる爲に、さま〳〵の維新前の俤を殘せり。宿は信濃川に臨める山田屋、入口古風にて蛙の聲など遠くにきこゆ。

五月二十二日、夜來雨、後又折々降る。

宿の湯殿の水桶にきれいな水を引き、金魚を放し、テンマリバナといふ白い花を、多く折つて來て漬けてある。それが灯の光に映じて何とも言はれず美しかつたことを記憶する。

長い橋あり、名を旭橋といふ。早朝に渡つて見ると、中洲には千鳥飛びて鳴き、川にはかちかの聲がする。向ふの堤には楊の木が多く、その花がもうほゝけて居る。始めて柳絮の風情を知る。

中學校に行きて參觀す。校長は同窓の江口俊博、もう五年も爰に居るといふ。又女子及び男子の小學校も見てまはる。

町役場に行きて町長にあふ。昨日の高橋老人あとより來る。

三島郡書記、片貝村の助役を伴なひ來り、午後歸途にエキストラの話をしてくれと賴む。

西脇建治君訪來。七百萬圓の分限者の弟のよし。專修學校にて予が講義を聽いた人。小千谷は又木村德衛君の家鄕也。

午後に講話。百二十人ほど聽いてくれる。そのあとくさ〳〵の談話。

高橋氏の話。この地方の習ひ、新田は一定の年期後に外新田となり、又或年數を過ぎて古新田となる。故にさういふ地名、今もそちこちに殘つて居る也。

魚沼郡の畠地小作料、一反に米にて年三斗より八升くらゐのものさへあり。畠多くして惡し。長岡附近に行くと、一石五斗までの小作畠あり。それでも作人の利益魚沼より多しといへり。柏崎附近も畠少なし。田の上に三尺以上の土を置いて作つても引合ふほどなり。その土は遠かなる川上から運ぶなり。

又高橋翁話。古志と魚沼三郡農民には、ユカ無き家に住む者多し（即ち土を掘り粃殼と糞とを敷きて其上に寢るもの）。官之を說諭すれども中々改めず。古志一郡にても八萬人は有るべしといふ。斯ういふ村々にても皆常食は米なり。全體に麥の產額は少なく、その栽培を擴張する爲に、麥食を勸むれども未だ行はれず。中頸城郡の試驗場にはやつと此頃壓搾機を入れたり。つぶして食へば幾分か食ひよしといふ。

八海山の麓、南魚沼郡大崎村のあたり。山の水が多も溫かく、是が爲に雪少なきこと著

しく周圍と異なれり。家毎に其水を引きめぐらし、又之を利用して菜を作る。この地方の名物となつて居る。

小千谷縮はもとは柏崎附近の製造多く、こちらは主として其賣買に參與せり。山の中ながら小千谷は商賣が上手なりき。風少なく火災の無い土地なれども、この二十年來戸數はちつとも增さず、近頃は僅かづゝ減つて居る。出稼と移住とは、魚沼三郡などは盛んな方なり。

小千谷の中學校は創立僅かに五年、募集まだ定員に滿たず、魚沼三郡の生徒は五分の一、他は海岸部などの餘りを拾ふのみ。寄宿舍生活でも費用は月八圓以上かゝり、町に下宿すれば九圓を超ゆ。遠くへ遊學さすると大したちがひ無し。町の小學校にすら高等科三年四年に止まり、中學に入らうとせぬ者まだ多きはどういふわけであらうか。

中學校の門を出る頃、雨降り出して松の花がしきりに散る。それが雨水に浮んで石の窪みにたまつて居たるは珍らしい光景なりき。

ユカ無き家

四時半頃、いよ〳〵こゝを立ち、片貝に來る。路傍の看屋に憩ひて飯を喫す。コロモガヤといふ菓子、この土地の名物、買求めて家に送らしむ。その他の名物は羊かん及び仙桃酒。こゝで粟盛といふはみりんを精製したものゝことも也。石黒忠悳翁の出身地もこゝ也。

淨照寺といふ眞宗の寺にて講話。聽衆は二百人以上、但し老婆子供もまじり、その子供拍手す。寺の太鼓を叩きて人を集めしなど、好記念といふべし。

夜十時頃になりて來迎寺に歸り來る。旅宿西九は滿員、やむなく高橋氏の別邸にとまる。夜おそくまでビールを飲みて話す。

五月二十三日、又雨

起きて出て見るに、好き山莊なり。松の花の盛り、楓の赤き花、又厚朴(ほゝ)の木の花も見ごとなり。

七時五十二分の汽車にのり、加茂に來て下車。こゝにて中村氏と別れる。

農林學校參觀。校長赤星氏と談る。寄宿舍の組織など特色ある學校なり。賴まれて生徒に話をする。

一時十六分で長岡に引返す。藤井當平氏出迎。山本といふ家に投宿。

五月二十四日、晴、風少しあり。

相原君と共に中學校を訪ふ。校長は不在。教頭竹村修氏に面會、大學の寄宿舍にて面識あり。たしか子規派の俳人なりしとおぼゆ。

女子師範學校を參觀、けふは授業無し。此學校の數學教員某君と共に女學校を見に行く。こゝも校長不在。次に此學校の書記某君が經營せる戰時記念の長陵園を見る。地積五百坪、借地なり。百圓の債券二十口を土地の人より出してもらひ鷄を飼へり。一口に付き毎日卵一つを利子として出す(一箇二錢八厘)。現在はその二十箇の鷄卵の他に、繁殖用にのこし又販賣する餘分あり。是と老雞の賣拂代を收入とし、原本は既に四分一を償却す。雞糞一羽につき五十目、收入の一割を働く者に與へる。この利益分配法を採る前には二十目に過ぎざりしが、今では是だけでも一羽一圓の收入あり。六十歳くらゐと十八ばかりと二人の

男を雇ひ、その外は細君と女中と共に働くなり。溫室は粗末ながら蒸氣を用ゐるもの二棟あり。燃料は石油、雪にも堪ふるつもりの由。

蕓薹は收穫が遲く、この地方では二毛作の裏作とすること能はず。それにも拘らず古志郡では盛んに栽培せられて居る。試驗場では秋田のハラキといふ品種を試みて居る。是は早期にて有望なりといふ。

來迎寺の神谷信用組合の理事高橋逸平氏及び岡村義彦氏來る。高橋は九郎翁の弟。

午後商業會議所樓上にて講話す。百二三十人の聽衆、途中で立つ者が多く不愉快なり。室があんまり廣く、聲を費して困つた。

古志郡長阿部氏に逢ふ。伊藤祐敬翁の甥、中島氏の出なりと告ぐ。市助役河島氏にも面會。是はもとどこかの縣の書記官だつた人なり。市長は舊藩主牧野子爵といふ。

寶田石油會社の高山・小秋元・山田など〻いふ人々にも逢ふ。小秋元は獨逸協會學校の卒業生で、社會政策學會の仲間、山田は我々より二三年後の法學士で、亡田邊慶彌の友人、會議所の書記長より、近頃この社に入り鑛山課長となつた人なり。寶田にては近頃畑鑛山といふを買入れ經營すること〻なりし也。

この山田の後任となつた賴久一郎といふ法學士は、山陽先生の曾孫のよし（支峯の孫なるべし）。夜此等の人々に招かれて學士會に列席す。內田といふは古き法學士、谷口は醫學博士なり。この谷口氏から美人のカノンといふものを說法せられる。

けさ學校からの歸途、相原と共にあるきて、あらかた市の全部を見たり。今の停車場の處は城址なり。河合繼之助の墓も近くに在り。市となる以前には長岡本町、千手など、幾つかの町となつて相鄰したりき。本町が士族ばかりの町なりしことは、高田村上なども同じ。

五月二十五日　晴、土よう

長岡より車にて與板へ行く、四里。高橋九郎氏同行、相原君はつゞいて每日共にあるく。長生橋を渡る。新潟の萬代橋よりも長しといへど、古く朽ちたる橋なり。まん中にしきり

ありて車なやむ。あまり長いので荷車など中途に休み妨げとなる。信濃川を渡れば土地一様に低濕、里川に水盈ち、あやめの花あまた水に映じて咲けり。

與板は信濃川に沿へる昔の川湊、近郷の米の集まる處なり。今も汽船はこゝまで上り來れども、汽車の制壓を受けてすでに衰へたり。汽車以前には、川船汽船が最も便利なる交通方法なりし故に、道路は此邊存外發達して居らず。

蒲原地方の水腐場、最も悪きものは臺帳地價反七八圓、賣價もほゞ同じくらゐなり。然るに小作料がやはり六七斗なるは不釣合なれど、是は一種の思はくにて、旱の年には二石も取れることあり。大抵の年には毛見にて減額す。濕地の埋立事業といふもの計畫せらる。モッコの土運び、二町以内の距離にて、一立方間の土を持つのに、人夫賃三口にて九十錢を要す。トロで土を運べば距離は遠くても同じことで、勞銀は其九分の一ですむといふ。しかし實際はさういふ土取場を見付けることが六つかしいかと思はる。

與板の町の背後は岡なり。宿の主人は才幹ありげなる男、銀行の支配人を兼ぬ。自ら案内して町の實狀を說き示す。岡に據れるは一萬石の大名屋敷なり。小學校の後より登る。以前醫者の住みし屋敷とて、梅多くある谷あり。池に蛙多く鳴き、荒れて物がなし。寺の庭を通りて外に出づ。此寺の六地藏を、町の爲に好ましからぬ家の門に舁きすゑて制裁を爲すこと、昔よりの慣習なりといふ。

近い頃破產して與板銀行に迷惑をかけたといふ大金持二戸あり。家はすでに取毀たれて菜種畠となれり。その一人にて元議員なりし某の山莊に登つて見る。川を隔てゝ東方に守門の連嶺を望むべし。稻掛けの榛の林のあなたには、汽車の煙も遠く見ゆ。こゝの主人は京へ遁れ行きてもう居らず。最も高い處に堂をいかめしくしつらへて、由緒ある觀音大士を安置す。正東に向ひませる御像の白毫の珠、守門嶽の雪に映じ、寂寞いはん方なし。詣づる人もあるか賽錢など落ち散り、それを集むる者も無し。

小學校にて講話、百人あまりの聽衆なり。縣の輸出米檢査所長江口英房といふ人に逢ふ。この四月まで佐渡郡長なりし人。其前は千葉縣の香取安房などの郡長なりき。老骨なれど

も元氣みちたる人物なり。

五時に爰を辭して見附の停車場に向ふ。高橋老とはこゝにて別る。川原より舟にて信濃川を越ゆ。小舟あやふげ也。この近村の富家某、けふしも庄田の酒井家より嫁を迎ふとて、人力車皆出拂ひたりといふもをかし。以前は此あたりにも三百輛はありしが、今はやつと百あまりなり。

南蒲原郡に渡り、中之島村を過ぐ。排水し難き水田遠く連なる。日暮の汽車にて新潟に入る、縣の第三部の小林・有元、農會の島口、林靜治などゝいふ人々迎に出てくれる。篠田旅館に投宿、大橋の見ゆる川沿ひの清らかなる室なり。

けふ聽いて來た話。湛水地の最も多きは中蒲原郡、北西南蒲原郡にも一部分、三島郡は與板町の附近なり。潟といふもの多し。西蒲原郡には鎧潟大潟あり。新潟も元はその一つの名か。月潟村は角兵衛獅子を出す理由を有す。北蒲原の福島潟などは海面との差僅かに三尺、海は全體に干滿の潮差少なく、內水の排除容易ならず。信濃川は屈曲し、與板附近なども、一旦は非常に海に近くなる。どこかその一箇所を切つて海に導かうとするのが、夙くからの計畫なりし也。大河津の今度の工事がどの程度に疏水の効を收め得べきかは、人によつて豫測區々なれど、其必要を認めざる者無し。

現在の水腐地概算二萬町、濕地を加へて約五萬町。道路を通ずるに先づ大いなる困難を感ず。土を得る場所の無き爲なり。されば此地方に限つて、耕地整理にも特殊の約束あり。一つには畠地が少なくなること、二には全體としての減歩を免れざること也。現在も畠地の分布は著しく不均一にして、農法の上に大きな制限を與へて居る。

西川と中ノ口川との二つの運河にも、第二の目的として內水排除と土の獲得が考へられしかと思はる。地藏堂と燕町とが、分水線の起點を爭ふのも、各地區の利害の根ざす所は深き也。

蒲原平野の古地圖といふもの、假に想像上のものとしても、それから以後の歷史を考ふる者には興味多し。

水腐地

五月二十六日、曇、微雨、日より

竹内進君訪來、市長吉田氏も來る。午後市役所樓上にて講話、二百人以上の聞手、大出來なりき。

夜鍋茶屋にて市長以下よりの招宴、知事も出席す。櫻井市作といふ産業組合中央會新潟支部其他の役員にて有力者、曾て沼垂停車場を破壞して牢に入れられた人なれど、金持にて俠氣あれば人に畏敬せらる。心もちの好い男なり。

五月二十七日　晴

終日逗留。けふも諸學校參觀。中學校長は長澤市藏氏、今より十六七年前に、郁文館にて英語を教へてもらつた先生なり。高等女學校商業學校にも行く。師範學校では小學六年の單級授業の實驗を見たり。

物産陳列場を見る。縣農會は此建物の中に在るなり。陳列の箱を一つ買求め家に送らしむ。

縣廳に行き、清棲知事に逢ふ。又竹内君にも逢ひ、耕地整理の事業に就いていろ〳〵聽く。出口吉久といふ判事、不在中に宿へ訪ね來る。

五月二十八日、晴

相川竹内二君と同行して、車にて卷町に向ふ。七里。彌彦山の正面なり。信濃川の岸には製油所あまたあり。きたないもの也。

路は西川に沿ひて上る。此川は地藏堂で信濃川から岐れて卷の町の傍を通る堀川なり。内野といふ處の近くにて、大潟より來る流れと十文字になる、所謂底樋川也。

曾根は相應な町場、そこを過ぎて正午に卷に着く。

郡農會の試驗場を見る。田中といふ場長案内す。蘭作に熱心な人なり。一體に西蒲原は蘭作盛ん也。販賣組合の計畫あり。菅も植ゑてあり。郡役所樓上にて講話。終つてすぐ三條に向ふ。此路四里半。吉田と燕の町を過ぐ。いはゆる第十九大區の低濕地の南端を通る。端雲橋を渡る。川の中に瓦斯あまた出づ。五十嵐川は此あたりにて合流する也。

川の中に瓦斯

日の暮に三條に入る。宿は越前屋、古風な落付いた小座敷なり。縣廳の小林氏先に來てあり。

けふの見聞中、農事講習の問題心に留まる。西蒲原は耕地多く農閑少なく、十二月に入らぬと講習會を開催し難し。それでも一年に十三四箇所、一箇所平均七日、この地方は學科單純にて、主として米作の改良、是に關聯して土工肥料の知識を授く。害蟲を別科としたるは專門の講師ある爲か。ともかくもあまり六つかしいことは說かぬ樣子なり。最近に一回終つた村では幾分か程度を高くす。一箇所三十五名位の豫定、實數はもつと多く、小學教員などの、勸めないのに出て來る者も少なからず。經費の少ないのが一つの特色、講師は縣の技師技手教員のみで、是には一文も金を拂はず。或郡では聽講者に若干の補助を出して居るが、西蒲原郡ではそれも無し。炭と茶とは村農會に負擔せしむ。

講習會を利用して藺蓆の生產奬勵をして居る。岡山から工場の經驗ある教員を聘し、土地產の藺を以て蓆を織らせて講習生に見せる。この生產高昨年は八千圓といふ。藺の收穫は八月、其あとに稻を作る。遲い田植なれど、それでも反一石に近い收量ありといふ。但し藺の栽植は前年十月、さうでないと三月になり、春植の分は收穫がおくれるから、米の裏作を斷念せざるべからず。つまりは二毛作はやはり困難なの也。蓆織の講習も別にして居るが是はやゝ長期、甲種の精良品は六ケ月、試驗場で敎へて居る。乙種は三十日、この方は巡回の講習もする。どの程度に藺作が普及するかは、今のところちよつと見込立たず。

又ハセ木の話を聽く。改良前の水田では、田間に稻乾し用の竿を立てることが出來ず、今まで稻を掛けて居た自然木（ハンノキ・タモ）も、大抵は民居の近くにのみあつて、村のまはりは丸で林の如く、それを村民に割當てゝ重い生のまゝの刈稻をこゝまで擔いで來て掛けて居た故に、勞力の上から見ても此邊のハセ木の利益は大なり。其上に自然木だと一本に九尺平方くらゐの土地を要し、且つ近くの田の蔭になり、田主はそれには苦情が言へなかつたの也。

五月二十九日、晴

ハセ木の話

外山旦正君井上の兄の紹介にて逢ひに來る。こゝより一里ばかりなる本成寺村の人なり。無理に短冊を書かせられる。裏館村の耕地整理を見てありく。藤塚某案内、場長の高山氏竹内君も同行す。

耕地整理の結果、小字の必要が無くなり、又現に無くなつたものも多しといふ話を聽く。此地方にて小字の又下に、御供田とか三反田とかいふ類の地名あり。之を名處（メウショ）と謂ひき。それは全く消滅す。地主は整理地區圖を印刷し、之を小作契約書に利用すると、ちようど芝居の棧敷掛の如し。

河砂を水田に入れる改良行事、少しづゝ行はる。高田附近にはまだこの事無し。

彌彦角田方面の山腹には畠作行はる。主として麥と菜種の栽培の盛んなるはこのあたりなり。

歸途町の書店樋口に立寄りて本を見る。主人は確に學者なり。午後某寺の本堂にて講話。聽衆二百人に近し。夜かの本屋訪ねて來て話をする。

五月三十日、雨

十時の汽車、小林竹内の二君と停車場にて別る。藤崎部長と矢代田まで同車、こちらは新津にて下車。

午後郡役所にて講話。桑原一部長馬瀨技師新潟より來り會す。夕方の汽車にて新潟へ還りてとまる。

五月三十一日　好晴

馬瀨技師相原縣屬と共に、新發田に向ひ出發、馬瀨君は自轉車なり。濁川村濁川新田に眞島桂次郎氏を訪ひ、村中見物。この人は名望ある中地主にて縣農會㕓なり。二百年前に此地を開發したりとて、庭前に縱の大木あり。但しこのあたりツツガといふ蟲の多く處。その除害工作の苦心談を聽く。小學校參觀。高等科で農業科の教授をして居る。

眞島氏自轉車にて同行、木崎村の梨畠を見に行く。ボルドー液の使用作業を見る。こゝ

には昨年の梨果まだ貯藏せられてあり。

新發田着、長谷川旅館とまり。江口英房老先に來てあり。

六月一日　好晴

又郡農會の試驗場を見に行く。森といふ場長と交談す。今は田植の盛りなり。

中學校參觀。教頭幸田文時君に逢ふ。第一高等學校の舊知なり。今井君といふ英語の教師は、三十四年十一月長野にて逢ひし速記者なり。

午後郡役所にて講話。けふは小作組合の話なり。夜眞島氏來る。馬瀨君等と共に碁を打つ。

六月二日、けふも好晴、日よう

新發田より村上へ車。

稻荷岡(紫雲寺)といふ所にて國道に出づ。到る處桐の花多く咲けり。又鐵扇花を處々に見る。

乙村(きのと)の乙寶寺、大日如來の御堂を拜す。三重の塔あり。城氏の菩提所もとの寺なり。

胎内川といふ處に至りて海を見る。荒川の月見橋のあたり、沙川廣く雲雀啼き、玫瑰の花かゞやけり。この川二十四五年前に海に直流するやうになり、輯製二十萬分一圖と全くちがつて居る。

岩船は昔の事思ひ出さるゝ港なり。其こなたに鹽谷港あり。岩船には石舟神社あり。石舟瀉今は小さくなれり。

瀨波の松山といふ處に、最近に開かれたりといふ溫泉場に行きてとまる。宿はまだ假普請。こゝに鄕里の代議士内藤利八來てありときゝ、行きて對面す。

岩船郡長金森輝夫君訪來る。戰中佐渡丸に乘り捕虜となつて居た人。その時は鐵道書記だつたといふ。夕方松林の中を逍遙す。

六月三日、好晴

こゝを出でゝ村上の町に行き、赤阪屋小一郎方に投宿。

午前中郡役所にて講話。聽衆六七十名に過ぎず。渡邊三左衛門君面會す。關谷の開發名主といふ。關の村は玉川小國を經て米澤に通ふ路筋といふ。一度行つて見る氣になる。

午後は村上貯蓄銀行十週年の祝賀會に臨み、又卽席の話をする。夜その祝宴あり、醉ひて歸る。代議士佐藤某その他、おろか者多く集まり來る。

昨日途上所見、岩船の近くにて松林中の墓地、松の木に著しき大小の差あり。よく見ると塚毎に其上に松を栽ゑる也。又大岩川とかいふ處にて葬式を見る。行列の人々、皆白いタスキを掛けて居る。

是は渡邊君の話。關村は長さ四里以上。國境に及ぶ。米澤の感化やゝ著し。但し交易は盛んならず。越後より干魚鹽魚が行く位のもの。米澤へは二十里餘、岩船からは六里。

全村牛を飼ひ又多く樹を植う。おもに杉なり。しかし米も相應に取れる。繭も共同販賣の機關あり云々。

六月四日、けふも好晴

馬瀨氏とこゝにて別れ、いよ〳〵けふは越後を離れる。

鹽の町にて車を繼ぐ。蒲萄峠にかゝる處は、風俗全く上越と異なれり。地形を察するに此地方は却りて彼よりも早く開けしかと考へらる。

北中村に憩ひて晝食す。茶店の名を札幌屋といふ。北海道に行きて還りし者なり。

中村よりひたすら降りて海岸に出づ。勝木村、耳にはガツギと聽ゆ。又小さな峠ありて大川谷に越ゆ。一名府屋。寂寞と荒れたり。

是より一里あまりにて鼠ケ關。縣境は關のこなた、原海といふ處の人家の軒近く木標あり。沖には大謀網といふを立てたり。こゝへ山形縣屬明日米藏君迎へに來てありしが、待兼ねて湯溫海へ引返したりといふ。

山形縣との海上交通に小蒸汽船あり。新潟酒田間を毎日、途中寄航する處、岩船・瀨波・鼠ケ關・溫海・加茂・湯之濱なり。海府では何處へも寄らず。但し川流しの木材と薪を積むべく、小さい帆船の來泊する所は數しれずあり。府屋の大川を始め、小さい谷川は多し。

多くは川の口南に向へり。

庄内の子供、村上の中學校に入つて居るもの十數名、年々增加する傾きあり。山形には中學少なく、入學志望者いつも四五倍、之に對して越後は各郡一校なれば、定員に充たざるもの多く、出來の惡い子も隨分入つて居る。縣がちがふと色々の事が、わざとかと思ふほども變つて居る。

漆の木は岩船と北蒲原とにて見かける(東蒲原などは多い由)。漆器は新潟の產物の一つ、堆朱は村上の名產なり。

下越後は牛多く縣南の馬と相對す。牛の群を牽いて行く博勞に屢〻遭へり。蒲萄山中には大規模なる牛飼ひ農あり。

黃蓮、村上の町に買入所の招牌を見かける。蕗は濁川村の名產といひ、新潟に賣る。栽培するものか。

桑は北部には高桑作り多きこと庄內に同じ、女の袴この爲に欠くべからずといふ。

湯溫海、越後屋淸左衞門方に投宿す。夕暮軒の電線に燕さゑづり、子供多く出て遊び、靜かなる湯の町の春の風情を盡せり。

葡萄の山中には雪なほ殘れり。藤の花、紅うつぎ盛り也。濱に出れば玫瑰多し。

あすは十五日間の同伴者相原君との別れなれば、竹岡屋といふに行きて酒を掬む。酌をする女はいはゆる里の遊君なり。

暗き小川を渡りて逍遙す。越後屋の娘案內す。みんちやんといふ名なり。鶴岡にてぴん子といふも同じく、小さい娘のことならんか。名では無ささうなり。

六月五日　曇

七時半頃出發、濱溫海まで出て相原君と別る。相原は例の小蒸汽に乘る。警報の赤球が揭げられてあるを見て氣づかはしといへば、是は此頃なまけて少しも引下さぬのなりとのこと、一笑す。

爰より豐浦村三瀨(さんぜ)までは磯山沿ひの路なり。米子といふ處にて、鼠のやうなるかたわの

子を見る。十四五歳にて頭は赤子のまゝなりと車屋いふ。

五十川を過ぐ。三瀬にて車をかへ、峠路にかゝる。頂上にて鳥海山見ゆ。庄内の平野に出づれば月山も見ゆ。里は田植の盛り、風俗大いに異なり。女たち黒き布にて顔を包みてあるく。名を加賀帽子といふ。髷は袋になり額は一文字、針で留める。

午後一時半鶴岡着。伊勢屋といふ旅店は前田控訴院長を宿したればとてことはる。公園の佐藤又吉といふ料理屋にとまる。給仕は藝妓らしき美しき娘なれど、なほ庄内の言葉なり。

午飯後、羽二重同業組合に行きて見る。副組合長巴田市郎右衛門といふ人出て話す。實着なるよき人物なり。この人と明日君と郡書記の芝田君と四人にて、羽二重の工場に行きて見る。又販賣組合にも行く。

夜、中學校長羽生慶三郎氏來る。飯田の人、家の舊知なり。

六月六日、雨

午前中、中學校及び郡立の染織學校を參觀す。午後、東田川郡廣瀬村後田の村役場に行き、此村の信用組合の話をきく。又松岡新田の話など。

此あたり路傍に腰掛石を置く處多し。駄路を行く者こゝに荷を置いて休む。石には寄進をした人の名を刻んである。

雨を犯して還る。夜廣瀬村の加藤正英氏來る。羽生氏も再び訪ひ來る。

秋田藩の江戸通路は、酒田・鶴岡・田川・菅ノ臺・溫海川・木ノ俣・小國・小名部、又酒田より宮ノ浦・十里塚・濱中・大山・三瀬と、海岸を行く線も有り、或は三瀬から田川へ出る路もあつて、藩主は大抵鶴岡を通らなかつたが、參勤に此道筋を使つた大名はたゞ佐竹家のみといふ。莊内の殿樣は却つて清川から古淵を經て、七ケ宿越えをして奥州街道の桑折に出たものゝよし。

鱈のカギといふもの、干鱈を作つた殘物、北海道から莊内へ多量に入る。冬季貧農の食物。價至つて廉なり。

腰掛石

六月七日　曇。風尤も寒き日なり。

朝こゝを立ち、藤島村の農學校を見る。校長若林功氏は札幌の農學士なり。折から生徒の間に何か事件起りたる樣子なり。

こゝを辭し、廻館といふ處を過ぎて、最上川を渡る。

松嶺町に着きて、信用組合を見る。町一の資産家齋前元修といふ人の力を盡せる組合なり。町長は志願兵の少尉、元氣なる人物。此町は鳥海の西麓に在り。この邊莊內麩の產地なり。原料の小麥、一部分は神奈川縣のものを使つて居る。ミワといふ種類のよし。生產者四百戶以上。製品は酒田より大阪へ出し、又東京へも轉送するといふ。

玆より寒き北風に吹かれて、最上川の右岸の堤を酒田へ下る。飛鳥といふ處あり。仁王の運慶作と傳ふるもの立てり。

酒田では三居(さんきよ)町の米倉庫を見たり。取引所の附屬なれど、公益的の施設なり。舊藩主の補助あり。

公園に登りて遠望し、山王の社に詣づ。

宿は三浦屋。夜商業會議所の書記本間專助君、來りて此地の現狀を話す。

酒田地方の女中の月給驚くほど安し。月五十八錢といふのが最高といふ。一體に女の勞銀甚だ低し。以前の湊場の繁華に比べると夢のやうな話なり。

米に次で重要なる此地の商品は繩なり。藁蓆は利益少なしとて取引盛んならず。繩商店は大きいのが十三四戶、每朝町はづれに出て村から賣りに來るのを競ひ買ふ。草鞋は西田川郡の海岸より多く出づ。所謂ツギ八草鞋なり。

六月八日　曇

酒田を發し、本莊まで十八里の旅、人力車なり。先づ松原づたひの路を行く。鳥海山は曇りて見えず。穗積といふ村にてもう車を替へる。この街道の變つて居るのは、兩側の村がちがふこと、卽ち道が村境であること也。右側は稻田村、次は川行村、左はずつと西遊佐村の藤崎、それから高瀨村の菅里北目、大物忌神社の標木ありて吹浦の町に入る。桶結

職といふ標札が目につく。又鶴岡一秀一忠錄ありといふ看板もあり。

吹浦は淋しき古驛なり、そこを過ぎて海上の大岩を彫刻したる十六羅漢を見て通る。湯の田の溫泉能登屋にて午飯。こゝにて山形縣の明日君と手を別ち、女鹿（めが）といふ漁村を過ぐ。縣境の峠には鶯ほとゝぎす啼き、藤つゝじ盛り也。海の風吹く。

峠を下りて又淋しい漁村あり。此あたりの總名を上濱といふ。

關といふ部落は象潟町のうちなり。昔の有耶無耶の關の址なりといふ。象潟の町に憩ふ。住民は多く北海に稼ぎに行き、淋しい町なり。蚶滿寺に入りて荒れたる四境を見てあるく。寺の旅人名簿に名を署す。數十年前からのかと思はるゝ古い帳面なり。

こゝからさきにも、地形の象潟と似た處、路の傍に幾つかあり、それを見つゝ行く。花のまだ咲かぬ百合、此あたりに非常に多し。食用にもなる種類らしけれども、掘取る人の手が無きなるべし。

金浦（このうら）を過ぎて平澤まで、同じやうな海岸つゞく。由利郡書記片野君、迎へに出て居てくれて同行す。平澤には齋藤字一郎といふ金持の家あり、主人は林學士（後に政治家となる）。この町はづれの濱にて地引網を曳くを見る。縣の海岸では此あたり漁獲最も多しといふ。

是より又砂防の大松林なり。縣道は快き下り道にて、やがて古雪川の岸に出で、本莊の町に入る。火のともる頃なり。

本莊は昔の城下と、古雪港といふ青樓ある町と、川の向ふの石脇といふ部落と、三つを合せて今の町を成せり。旅宿は小園といふ。夜片野氏來る。この人は横手住の佐竹家臣なりといふ。

按摩を呼ばしむ。

六月九日、晴　日よう

午前郡役所にて講話。午後は精米所を見に行く。この米は北海道に送るといふ。町の人長田藤四郎氏いろ〳〵説明してくれる。この人は秋田に精米所をもてり。又米の倉庫に行き、輸出米檢査の狀況を見る。

この朝、試驗場長佐藤氏訪ひ來る。夜はこの人と片野氏との案内にて、宮丸六兵衛といふ料理屋に行きて酒を飲む。甚だ樂し。西の窓をあけて夕空の鳥海山を眺めたり。雲のむらむらと殘れる山の姿世に似ず。

六月十日、好晴

本莊を立ち、山を越えて横手へ十五里、車の旅、氣もちのよい日なり、子吉川の支流に沿へる登り路、水の音清し。

館・宿・老方・館合などいふ村々を過ぐれば峠の頂上なり。是よりは快き下り、大澤といふ村を經て、雄物川を橋より渡る。

桑の林の中に、郭公しきりに鳴く。此あたりの躑躅、いろは至つて淡く花大いなり。道の傍に野飼の鳥なく、又二歳駒をあまた率いて行く者あり。淺舞の町にて晝食。

二時少し前に横手に著く。すぐ郡役所に行き佐藤郡長に逢ふ。その案内にて城山に登り遠望す。仙北三郡の平野は中々廣いと思ふ。

郡立圖書館に入りて見る。こゝにては工女にパテンといふものを教へて居る。

折から秋田より電話かゝりて、今夜ぜひ來よといふにより、計畫を變へて四時半の汽車に乘る。

秋田に着き小林旅館にとまる。夜は下岡知事と共に、クラブといふ處に行きて食事會談す。

六月十一日、曇、後降り出す。

七時半の汽車にて扇田に向ふ。縣農會書記館岡勝藏君同行す。北秋田郡長前田氏、雨の中を鷹の巣まで出て來られる。大館にて下車。扇田へは一里。路わるし。

小學校の樓上にて講話。こゝにて鹿角郡長河野氏と逢ひ、小阪の鑛毒問題、鑛業對農業の話を聽く。

大瀧の溫泉に泊るつもりを變更して、大館より汽車に乘り能代驛まで、こゝと町とは一里以上あり、人力車にゆられて行き、とまつた宿がきたなくて大いに後悔す。

六月十二日、雨、後霽れたり

能代より汽車にて引かへす。車中幸ひに町長警察署長など〻一しよになり話を聽く。其前に山本郡役所にも行きたれど、時間無くて早々に引上げし也。

土崎驛にて下車、南秋田郡役所に寄る。郡長等面會。赤十字の會ありて常務は手に付かずといへり。

秋田の旅舍に還りて休息。夜松崎加藏、梅原などいふ人々來訪。兄の舊友赤星敬次郎氏、宿の近くに病院を開き、昨年秋は大いに世話になる。この朝名刺を置いて來たのみにて、つひに逢ひに行くひま無かりき。

六月十三日、晴

夙起。秋田出發。控訴院長前田孝階氏の一行と同車す。

山形下車、先日の明日米藏君迎へに出て、後藤旅館へ案内。佐柳亥角の二事務官も來訪、又田中與七君も來てくれる。

夜縣參事會員加藤正英安部彦四郎の二氏來談。加藤は鶴岡でも逢つた人なり。安部氏は北村山郡小田島村蟹澤の舊家のよし。

六月十四日、微雨、けふは五月の節句。

昨日の田中君と二人、金井村志戸田なる信用組合を見に行く。事務所は遠藤甚兵衛といふ大地主の家、昔なつかしき作りざま也。

午後宿へ若林功氏來訪。藤島農學校の校長なり。小松へ所用ありて行きし歸るさといふ。師範學校を參觀に行く。こゝにて女子師範と中學の校長にも面會す。柔道の試合の日なり。其集りに對して又話をさせられる。

歸途縣廳に行き佐柳君に逢ふ。同君等の案内にて物産陳列場を見物す。

不在中從妹の夫山内大尉來訪、仍てこちらからも訪ねて行く。千歳山に面したるよき住居なり。妻幼兒にも逢ふ。

千歳館に行き、佐柳亥角の二君と會飲す。こゝは五年前の八月に、荒木大藏君につれて

來られた家なり。再びヲバコ節を聽き、又球を撞く。後藤屋といふ宿も明治三十五年からの馴染なり。其頃の老母は既に世を隔つ。

夜は按まをよび話をきく。

六月十五日、晴

山形出發、佐柳君及び山内夫婦見送。明日君も來てくれる。案内役は田中君なり。

赤湯にて下車、沖郷村大字荻生田の購買組合を見に行く。組合長高橋五郎次氏を村役場に招き話をしてもらふ。蠶事の最も忙しい時なり。十二時の汽車に乘る前、少しく驛の附近をあるいて見る。置賜の平野は四周悉く殘雪の嶺なり。こゝにも五年前の遊蹤あり。一昨日赤湯小學校の校長、白龍湖に舟遊して水に溺れたりといふことにて、今も此あたりは大騒ぎ也。

米澤にて下車。茜屋にとまる。

工業學校を見てから、模範工場を參觀に行く。機械にて羽二重を織るなり。社長は池田成章氏、米澤の古老にて人格すぐれたる人、鷹山公世紀の著あり。相對して談ること多からざりしも、おのづから畏敬の念を起す。

前田院長・岩本所長の一行に又爰にても遭へり。閑院宮殿下昨日秋田の赤十字社支部總會に臨みての御還さなりとて、人々御見送に出てあり。

夜町をあるきて古書を覓む。一も得るところなし。

六月十六日、晴、風冷、日よう

朝のほど公園を見巡り、又上杉神社に詣づ。

九時半の上り列車。又〻前田氏等と同車。織物同業組合長色摩某君對面。わざ〳〵跡を追うて來られたの也。田中君とこの驛にて別る。板谷山中の初夏、心ゆく水の音なり。

福島にて石井善兵衞氏に逢ふ。裁判所長にて父の舊友。縣技師山上正夫氏と須賀川まで同車。明治三十八年の舊知、夫人は姉の友だち。

郡山に近づく頃、窓から顔を出して帽子を水田の中に落してしまふ。

農事試驗場の上田技師、郡山より乘込み來る。人參の病害を調べに會津に行き、是から日光に行くところといふ。此人も三十八年の八月に、福島へ行きがけに逢ひし人なり。其折の花井君は今統監府に轉任してありといふ。

氏家の驛より笹川臨風君乘り來る。久しぶりなり。米澤で買つて來た櫻桃の一籠を分つ。

夜八時半上野に着きて還る。家は大かた事無し。

歌集「山さと」序文

——昭和八年——

二十七年前、始めて外山君と逢ひて談らひしは、越後三條の越前屋といふ旅宿の、靜かなる奥の離れ、時は五月末の頃の、雨の後なりしかと覺ゆ。庭の小池にぱ花あやめ多く咲き、樹蔭には小手毬の花などありて、時鳥も啼き渡るべき曇り空の、水に映りて白かりし夕暮思ひ浮べらる。この歌人は年尙若く、同じ年頃の僕を一人つれて、見參の禮儀の慇懃に又古風なりしことは、今も忘れ難し。其頃は殊に口重く、久しき對座の間にも、執心は專ら歌道の上に在りて、絶えて世間の話題に觸れざりしことは、かゝる官僚の旅路には珍らしき例にて、まことに是をやまれ人とは言ふべきと、傍なる客を顧みてうなづきあひた

りき。おのれも其折は齢未だ傾かず、輕々しく物に興ずる癖あり、かつは風雅のすぢにも疎からぬことを、示さんとする下心さへありて、悅び聽く人のあるに任せて、定めて種々の問はず語りをしたりけらし。今は其一節をすら思ひ出でざれども、弘くまだ國々の旅は試みず、都府を愛するの念、今よりも盛りなりし頃のことなれば、其日の語り草も大方は推し測り得らる。本の主は年よりて既に忘れ、外山君のみは永く之を記す。昔の友ばかりなつかしきものは無かりけり。

此後又八歳を隔てゝ、歐洲戰亂の正に酣なりし頃に、ロバートソン・スコットといふ英國の文士、妻を伴なひて我邦に訪ひ寄り、おのれが田園の旅を好むことを聞き知りて、導きて日本の殊に平和なる村々を見せよと乞ふ。乃ち同學の那須皓君と共に、那須の火山を越えて南會津に入り、田島の夏祭を見て湯の俣の山の湯に泊り、川原眞白なる只見川の岸に沿ひて、世に謂ふ御藏入りの谷を馳せ過ぐること二日、柳津の虚空藏に詣でて潭の魚の靜かに遊ぶを羨み、暑き日に野澤の驛より汽車に乘りて、越後には下りたりき。蒲原の平原は桑圃遠く連なり、それを出づれば一望の稻田、青々として末は雲に入り、異國の旅人の眼を驚かしむ。外山ぬしは豫ておのれが求めによりて、自ら三條の停車場に迎へ、車を列ねて田の中の路を行くこと一里餘り、三ッ谷の故郷の家におのれ等四人を招じ入れたり。路より横に折れて一町ばかり、美しく掃き清めたる門前の徑を、更に箒を揮ひて老いたる下部の、後じさりしつゝ歸り行くは古式なるべし。家は古からねども中門の型なほ存し、庭を廻れば書院の軒は深く、内には露地と板椽とを取り繞らし、外には五六本の老松ありて、見るからに先づ凉し。此松の木の綠の間より、南の方には稻田廣々と見え、晴れたる空の夕日、其上に照り渡りたるが、家の中なる金色の屏風に映ずる光景は、靜寂として夏の旅の苦しさを忘れしむるに足れり。やがて水使ひ食事をしたゝめ終り、黄昏の漸く催すに及びて、軒に蚊遣を焚き、家刀自は座に出て款談す。此頃長子曆郎君尙穉なく、末弟哲二郎君は中學に在り。共に袴を着て客と對し、通譯に由つて色々の問に答へたり。スコット夫人は愛蘭の出なれども、曾て蘇格蘭に在りて最も其風物を愛すと謂ひ、兼て又彼國の

田園詩人の、境涯の此主人に近き者を知るといへり。那須君は曰く、君知らずやバーンズのロングサインは、一たび日本に入りて船人等の別を惜む歌と譯せられ、更に其餘調は螢の光といふ小學校の唱歌となりて、毎年この小さき人だちに歌はるゝなりといふ。さなりや然らば歌ひて聽かせたまへ。おのれも其本歌を吟じ試むべしとて、こゝには珍らしき國際の歌垣の、鄰も無き家の内に響き渡りしことは、歌よむ家主はさら也、子も弟も又其折の旅人も、いつ迄も記憶する所なるべし。此の夫婦の外客は國に歸り、今はオックスフォードに近きキングハムといふ岡の邊に住めり。十年あまり前におのれは其宿を訪ひて、一夜越後の外山ぬしの、家のまどゐを語り合ひしことありき。夜ふけ歌終りて庭の松の樹間より、晝に引かへたる滿月の光の、白銀の如く澄み渡りし夜の景色、今も身に沁みて忘れ難しと。此夫人もかの靜かなる田中の家を、なつかしきものに思ひ出づといへり。

越の國の習ひとして、外山君の家には昔より旅の歌人、田舍わたらひの俳諧法師など、秋の稔りの頃を測りて絶えず訪ひ寄り、冬春の境には雪に降りこめられて、永く留まりて、炉にあたり、溫かきもてなしを欣び、之を思ひ出でては久しく文通はすなど、殆と歴代の家主をして、坐ながらに風流の好士たらしめずば止まじと、巧み企つるかと思ふやうなりしに、新たなる主人の世になりて、我と都に出でて歌詠む業に勤しみ、更に又志深き人々の爲に、進みて斯道を說き明らめんとせらるゝに至りしは、素よりたゞ世の常の轉變とのみは言ふべからず、おのれ等が眼には祖先の德の積り、遙かに行くものゝ本に反り、盈ちたるものゝついに溢るゝ理とこそ思はるれ。然るを此主は、はた如何なる思ひ出での有りてにかあらん。斯くして故鄕の家を遠ざかり、塵の衢の中にして、懷ひを月花の境に放ち遣るやうになりしも、すべては柳田といふ者のなせるわざの如く、思ひたまへりと聞くは誠にいぶかし。おのれ年とりて物忘れ愈〻繁けれども、今はとにかく此君を誘ひ出したりと、思ひ當る節は一つも無く、古き交遊の跡を顧みるに、たゞこの二度の安らかなる思ひ出でのみ、時を重ねて益〻鮮かに、目の前に描き出さるゝ心地せらるゝは如何に。おのれ等が知る限りにては、外山君の境遇には變化多し。歌も生活も父祖の世のあらましを越え

て、新たなる野邊を伐り開き、文の御苑に新たなる花を栽ゑて、この大御代に仕へまつらんとせらるゝことは、君の力にして又境遇の賜なり。二十年前の外山ぬしを知る者にして、始めて是をさもあらんと思ひ、又この歌卷の世に出づることを、心より悅び且つことほぐことを得べくなん。

北國紀行

——明治四十二年——

五月二十六日、水曜

夜來雨、五時に起き六時に家を出て、飯田町六時三十五分の汽車に乘る。

山々は曇りて見えず。淺川の川原には月見草多し。桐處々に花さく。

郡内の川の荒れてゐるのは、一昨年の水害の痕なるべし。鳥居の三分の二ばかりも土に埋もれたるなど、まだ其ま〻になつて居る。

甲府で買つた月の雫。名ばかりでたゞ下等なボンボン也。

富士見のあたり白樺の若芽めづらし。何處へ送るのか、はひ松を汽車に運び入れて居る。

小野村の山間の古い家で、雨が降るので子供たちが、縁先で遊んで居るのが遠くから見える。赤ん坊を負つた大きいのが一方の端に立ち、小さいのが一人づゝ、其前に出ては禮をする。卒業式の眞似か何かであらう。

鹽尻のトンネルを出ると躑躅がおもしろく咲いて居る。大輪の褪紅色の、この邊で鬼つつじといふ花である。

五時に鹽尻着、建築所員は出迎へてくれたが、トロは鳥居峠のこちら迄しか通じて居ないと聞いて力を落す。傍車場前のます屋に泊る。三階から山の雪が見える。それが明日越えて行く路である。

ブランデスのアナトルフランス論を讀んでしまふ。

昨年のけふは備後の鞆から三田尻へ武庫川丸といふ汽船の中に居た。

五月二十七日、木曜

夜來は風、けさは又雨になる。

七時十分、建築列車に便乘、櫻澤まで三里弱、櫻澤は先年陛下の御小休ありし處なり。名木の櫻、線路に當りたれば惜むべし伐拂はれたりといふ。

贄川へ一里坂本屋に入りて休む。大きな家なり。

平澤は名の如く少しの田あり。檜の木の厚さ四五分の板切れ、贄の木地とて多く積重ねたり。柿と塗物がこの山間の今の生業で、人夫として鐵道工事に出る者も二三人しか無いといふ。此邊の山に木が無くなつたのは維新後のことで、道中の時代には山も青々として居たといふ話。

福田定吉といふ工員が親切に世話をして、奈良井までは工夫に荷物を持たせて送つてくれる。こゝで巡査に賴んで薮原までの人夫を見つけてもらふ。美濃の養老から來て居るといふ男なり。今まで何處に行つても人夫をやとへば必ず他所者であるのは何故であらうか。土地の人には定業がある爲か、又は斯ういふ雜役を賤しむからか。又は斯ういふ者が特に熱心に仕事を求めるからか。三つとも恐らくは原因の一部であらう。

鳥居峠は思つたより小さな峠。頂上には成るほど鳥居あり。茶屋には其繪葉書あり。ゴムのスタンプを備へ付けて居るのには一驚を喫す。こゝから左に駒ケ嶽、右に御嶽が共に雪白く望まれる。

鍛原の米屋に憩ひ、宮越から來た人力車をやとふ。こゝでも古風な檜物類を作つて居る。メンツウは近年北海道へ澤山行くやうになつた。一個七錢位といふ。

冬の秣は二百十日も過ぎてから刈る。折角の萱野は有りながら、屋根は板葺きであり、馬には莖の立つた粗い草を食はす。是れ秋蠶に追はれて草刈りに行く暇が無ければ也。斯ういふ點でも馬と蠶とは利害が衝突する。

鍛原より少し南に、右の方山に入るよい路あり。是が野麥越の入口か。南受けの斜面は藤とつゝじとで飾られて居る。此奥に菅といふ八十戸の部落あり、眼科と小兒科と良き醫師二家ある爲に、松本あたりより來る人多しといふ。

路傍で小兒が草の花を採つて露を吸つて居るのを見かける。いら草のやう也。

宮越のコシは腰又は背後の意味か。南宮神社といふ社あり。木曾氏の居城といふ。德音寺はよい寺なり。此宿の若松屋といふに憩ふ。三時に福島に着き、林野管理局支廳に行く。田中支廳長その他の人に面會。それから郡役所に行き永井書記に逢ふ。藤江再吉君といふ縣林業技師もこゝに至り。此人は三十四年の十一月に、上伊那で知つて居る。

蔦屋に投宿。大きな家の三階、木曾川に臨めども山迫りたれば風景無し。

御嶽は鳥居峠でないと見られぬと震災豫防の報告にはあるが、福島の町の北入口あたりからもよく見える。空も晴れたれば明日山に入る計畫をする。王瀧の出張所長井深丹吾君來り同行の約束をしてくれる。藤江君も再び來て色々の事を話してくれらる。御料の人たちとは河畔の一小亭に會食して、ゆる〳〵と問答する。以下は其談片なり。

馬を二匹も三匹も田に入れて、たゞ引張りまはして居るのをよく見かける。是は刈敷を踏み込ませるのみで無く、あれを田うなひの代りにして居るものらしい。

刈敷は上古以來、今でも山間の村では主要なる施肥法である。刈敷植物の範圍は段々と

廣くなつて居る。萱なども此邊では秣よりも綠肥に多く使はれる。安曇地方では初夏に喬木の若枝を伐つて來て、田に入れて馬に踏ませ、後に田の中から堅い枝を拔き出して、乾して燃料にする處もあるといふ。

原野のまん中に松の木がばら〳〵と立つて居て、風景をなして居るが是も燃料用である。大抵は三十年位で伐る。

開田村一村だけは、公有民有ともに山林といふものが一切無く、地目はすべて私有原野となつて居る。此地方の山畑農業は半燒き半切替ともいふべきもので、卽ち若干の林業收入を期して居る。播くのは主として蕎麥と豆類。燒畑の完全なのは下伊那の旦開村などへ行けばまだ見られる。天龍川沿ひの村々には、杉の造林の端境だけに、二三年位も豆などを收穫する者がある。

山の火入れを禁止するといふのは無理で、隱れてするから却つて火の害が多い。やはり森林法の取締りに委ねる方がよからうといふも一說。

山民の食物は悲しむべく惡し。開田村などは主として蕎麥粉のねり粥と稗。麥は作りながらもすべて賣却する。米は賣る程も出來ず、何か賣らないと買ひたいものが買へず。

奈良井では桃が咲いて居た。入山は一帶に今桃の花が盛りなりといふ。

五月二十八日、金よう、半曇

昨夜は熟睡、八時に起きる。昨年の昨夜は筑後川左岸、朝倉の木丸殿址の水番小屋へ一泊して居た。

一昨日が舊曆四月八日、家々の門口には花を挿して居る。又軒にアヤメのやうに葺いたものも有り。花はツヽジ、フヂ、又山吹も門の柱にくゝり付けてある。卯月八日にも斯ういふ風習はある也。

家々は板壁にて、土を塗るものまことに少なし。土はしけて宜しからずなどゝいふ。板屋には隙間が多く寒さうなり。

年中木を焚くこと多し。長さ三尺、高横各六尺の量を一間と謂ひ、一冬五十間を消費す

る家は珍らしからず。十月中旬に稻刈を終つてから、この薪樵りにかゝる也。

十時に福島出發、馬車にて上松まで、途中寢覺の床一見、臨川寺の建築は普通の農家に變らず。川に臨みたる棧敷の屋根だけは、別に小さな切妻作りなり。

上松にて川を渡り、小川の谷を登りて高倉峠を越え、小川伐木事務所に宿す。同行は三殿出張所長青木氏、上松出張所の多賀氏など計五人なり。

山中の人は多く山の草を食す。ウルヒ又はウリといふは玉簪花のことゝおぼし。ウルヒ澤といふ地名ある處を過ぐ。その一つ隣は麝香澤、この檜の木最もすぐれ、香氣高しといふ。

木曾の山は少しも大鋸といふものを使はず、すべて斧にて樹を伐る。川流しの木は、端を平らにすると岩や他の木に突當つて裂け割れるので、端を圓くして置く必要が有る。故にいつそ始めから斧で斫る方が勞少なき也と說明する。

運材夫は一般に日傭といひ、其作業を狩りおろし、大谷狩小谷狩などの名目あり。掛け聲にハツタ・サイタ・五分サイタ等の過去完了形を使ふのが力强く聞える。五分サイタは少しさせといふこと。

アスヒは青森のヒバ、南部のヒノキ、北陸でクサマキといふのと同じ木、ネヅコが黑部杉と同じものなることを始めて知る。木に硫酸を注射するに、檜のみは之に堪へずといふ。藤の蔓が此山では乏しく、檜の皮を之に代用して居る。

林中にホヤ(寄生木)多く、ホヤの實を山鳥が好みて食ふ。かし鳥はカケス、人語をまねる。針葉樹の實を食ふから害鳥と認めらる。栗の實を畠地の隅などに埋めて置く面白い習性がある。兎や鹿も林の樹を害するので嫌はれて居る。

この他いろ〳〵の地形語などを聞き集める。ホラといふ言葉はもう木曾の方にもあることを知る。ヌタといふ語はこゝではきかず。田代は大瀧川の谷にもあり。それを假字で書く地名は多し。

五月二十九日、土よう。雲あれども午後は昨日より暑し。

朝八時こゝを立つ。青木君外二人は千秋山道分岐點より阿寺の方へ行き、多賀君は王瀧村境の小屋までにて別れ去る。一昨日の井深君外一人とこゝまで迎へに出てくれる。午少し過ぎ王瀧の上島著。御師で宿屋をする瀧龜松方にて晝食。二時にこゝを出る。同行井深林二君。

付知新道を氷ケ瀨まで來て右に折れ、瀧越道、濁川から又右に折れ、濁川の溫泉は著いたのは五時少し過ぎ、此川は御嶽の地獄谷より出づといふ。水の音かまびすし。赤くてぬるい湯なり。左右の足に豆が二つづつ。

日傭が冬はく草鞋は、粗末にてなるだけ柔かなるものを用ゐ、少し馴れると破れぬうちに棄つる。斯くせざれば滑りて丸太の上は走られぬ也。

王瀧川へは美濃から魚を捕りに來て小屋を掛ける者がある。御料林の休泊所も開放して彼等に使はせる。捕つた魚は土地で金に換へて行く。火にあぶらずに鹽にして貯へるは古風なり。

駒鳥は一谷にたゞ一つがひづゝ棲むといふ話を聽く。

タエテといふ副詞を昔の通りに使つてゐる。

五月三十日、晴

朝七時こゝを立つ。冷氣驚くばかり也。昨日までの同行者、皆それ〴〵の方角に向つた、井深氏一人案内役となつて殘る。

瀧越へ越ゆる峠も中々險し。瀧越は又ミウレとも謂ふ。中部地方一帶に、ウレとは上のことなれば乃ち水上の義なり。全村十七戸皆三浦氏、三浦の落人なりと傳ふるは後の解釋と思はるゝも、何れはさういふ武士の末ならんか。最も古い家がどれなるかを知るのみにて舊記はもたず。爰のみは打開けたる平地にて、もとは湖底なりしことほゞ明か也。川沿ひは峽谷にて瀧あり。瀧越の名もそれからと思はる。白川の入を美濃の加子母へ越ゆる白巢峠あり。斥知新道が開けてより、殆と廢道に歸せんとす。

三浦藤次郎といふ家に憩ひ、支度をして人々と別れる。王瀧の人夫も還り新たに文六と

いふ若者を頼む。柚にも出たことのある男にて、此村としてはやゝ世間を知る。

昨年熊に逢つたといふ處を過ぐ。その熊は二月になつて捕られたり。皮の價十五圓なりし由。熊笹の中を分け進みて、三浦の休泊小屋あり。是から奥を三浦山といふ也。もとは高山の支配なりしを、明治の初年管轄を爭ひ、官裁を受けて之を木曾に附けることゝなれり。現在は飛驒の方の出張所分擔區、すべて二里位が限りなるに、木曾の方には七八里にも及ぶものありて、盜伐の防止行屆かず、之を前者に依賴するやうな實情なりといふ。

國境をこゝでも三國といふ。その少し北の方、境塚の立並ぶあたりを飛驒へ越える。竹原川の流れは次第に成長し、やがて益田郡竹原村の御厩野（みまやの）といふ部落に入る。こゝも山の腰の僻村なりしことを、過ぎて振回つて始めて知る。縣道まで降り付けば、美濃から三國の向ふを越えて來る路と合する。そこに梅野屋といふ旅舍があつて暫く休息する。縣道は竹原川の流れに沿ひて北に下り、それが乘政川と一つになつて、下呂の近くで益田川と合流するまで、半日餘りも此水と伴なうてあるきし也。

下呂の吉村屋は益田川に近く路傍なれども居心地よき旅宿なり。夜下手な按摩を頼む。

五月三十一日、月よう、晴

名古屋支廳の奥田技師が、門前の路を過ぐるを喚び留め、小坂まで同行してもらふ。小坂出張所長も出て來て逢ひ、暫く其役所にて談る。

午後は徒歩にて落合の唐谷（からたに）伐木所一見。主任小原君途中まで出迎へ、この事務所までは小坂から三里餘、更に半里奥に至る出會所といふに行きて宿泊す。山中塵無く明淨喜ぶべし。給仕の少年を茶坊といふ。輕捷にして又親切なり。

六月一日、火よう　晴

早天に爰を出で、小谷狩に使ふといふ堀川を見る。堀川の端にて奥田技師と別る。この人津輕弘前の出といふ。小原君は同行して小坂に下る。途中腰痛み少々難澁なり。

往復とも山口の松島屋といふ家に憩ふ。山に供給する雜貨をあきなふ店なり。爰にて立山熊膽圓と稱するダラニスケを求めて服用す。又蕨粉を所望して晝食にかへる。

午後一時前に出發す。久々野の坂の下まで人力車、こゝにて車を替へ高山へ、五時到着。郡役所に行くに皆還りて至らず。長瀨といふ旅宿にとまる。牧野君の家はよい宿屋なりしが近頃止めたりとのこと也。

小林區署の伊藤佐藤二氏來る。夜又按摩をやとふ。莊川村の海土といふ部落の產なれば、色々と山の事を問ひ試む。かの山には山男などは居らずといふ。

六月二日

高山に滯在す。郡役所に行き柿元郡長に逢ひ、又白川村選出の郡會議員高桑君を紹介せらる。町へ出て明日の買物をす。平田書店に行き主人と話。歸りて旅宿の主人を招き白川の話を聽く。珍らしい話いろ〳〵。

夜伊藤柿元高桑の三氏來訪、又平田、住の二書店主も來る。

縣技師岩淵君逢ひに來る。

メレジコフスキーのイブセン傳を讀み終る。

六月三日、木より、作夜もけふも雷雨。

朝六時四十分出發、牧ケ洞の峠の下迄人力車。伊藤署長と三日町保護區員の田中某、こゝにて待合せ同行。峠の頂上の茶屋に憩ひ、又行きて夏厩(なつまや)の保護區官舍に憩ふ。

小鳥(をどり)の山道に雷雨來らんとす。傍の製材小屋に入りて休む。

山梨の木を伐り殘して、五六本立てる處あり。大木にて每年實が澤山なる。淸見莊川二村の境あたりの山殊に多し。此邊は桃の實さへも旅人の採り食ふに任せてゐる。

小梨の花盛り、郭公頻りに啼く。此野薙畑多く、又以前の薙畑の地新畠となり、人家の常住するものあり、又白樺の林となれるもあり。

六厩の宿にて伊藤田中の二君と別れ、莊川小林區署の小川君と同行す。輕岡峠の下り口まで莊川の署長公文(くもん)克八氏出迎へらる。土佐安藝の人といふ。

五時半に莊川村新淵に著く、それより半里下流、牧戸の寺田安之助といふ家に行きて一宿す。夜此村の村長若山君、村書記前田君來りて色々の話をしてくれる。

雍畑は各自所有の地にも、共有の地にも、又他人の地を借りても作る。通例五年作れば其後三十年四十年も荒すこと也。順序の一例は稗—粟—大小豆—蕎麥—荏など。稗は一反に二升ほど播く。常田畠の三石を上の部とし、山畑にては一石くらゐの處もあり。搗きて十分の三の穀を得。粟は一升を播く。上々で一石六斗位、穀五割。大豆は賣るほども取れる。四斗二升俵近頃の相場四圓内外、荏は一反に一石三斗位までとれる。一石十圓内外の相場。

共有地の雍畑は使用區劃を割て貸渡す。私有地を人に作らするに二種の方法あり。一は五年間をまとめ賣るもの、一町の價まづ十圓位。次は一年一作毎に貸すもの、實收の半分を現物にて徵す。之を苅分けといふ。苅分けは常田畠にもあり。田は二分の一、畠は三分の一を地主の分とす。

六月四日、晴

朝霧深し。六時半に起き、七時半出發。若山村長迎へに來る。此邊のツツジは輪大きく花の色艶麗なる紅にて且つ香氣あり。川の岸田の畔にも多し。藤も今ちようど盛りなり。栃の木處々に花さく。林をなせる處もあり。此實は蓬と共に冬分の食料となる。近年椀木地用によほど伐られたり。椀木地には縱目横目の二種あつて、職人はそれぞれちがふといふ。岩瀨の若山村長宅による。稚蠶の共同飼育をして居る。

中野の入口路上より三方崩の山を望む。その下が御母衣（みほろ）なりといふ。村境の橋まで來て村長と別れる。

御母衣の遠山喜代松氏に憩ひ晝食す。此あたりを中ノ切といふ。出居に珠數を掛くる衣桁のやうなものあり。是に家族の數だけの珠數が掛かつて居る。此奥が佛間、内陣といふ。眞宗東本願寺派。本山の大門の爲に樹を出した話などを聽く。

部落有の薪山は昔から各家大略の採場あり。是を雍畑に開くも隨意なり。雍畑あとの茅は苅りて牛馬を飼ふ。

山地の材木は根に近い方が價安しといふ話。

荻ノ町の宿は大阪の商人四人、神戸の外商一人、鑛山を見に來て居る故ことわられたり。

鳩ケ谷の田中といふ家に行き泊る。

村の助役木村、書記白根、前村長白木の三人夜分話に來る。城端から來た荷持を約束し、高山の人夫を返すことにする。

此宿の主は越前鯖江の者、四十年前に武生の鍬先を賣りに入つて來て、其のまゝ爰に住み著くといふ。斯ういふ他鄕人との緣組、この地には珍らしからず。

六月五日、土よう、風雨

朝四時半に起く。空模樣よろしからず。六時にこゝを立つ。役場の書記白根、送つて赤尾まで來り、途々色々な話をする。高山生れの青年にて、昨年八月から爰に來て居る。何か事情のあるらしき優男。荷持は城端の者、昨日夕方こゝに來てもう引返す也。ボッカと稱して一種特色あり、高山では繪葉書にもなつて居る。長年の經驗によつて裝束身ごしらへなど考へたものなり。太い撞木杖の石突に鐵をはめ立ち止まるときは少しの間でも是を荷の尻に當てる。歩くときは息杖とし又は小脇にかゝへる。牧ケ洞にては左の一脚無き男の、之をついてあるくを見たり。此邊にては之をニヅエンボといふ。荷杖棒なるべし。

ボッカの最も多く出るは五箇山地方といふ。五箇山は赤尾附近の盆地、周圍すべて山。賀州領にて流人を遣る處となつて居たといふ。

白川一村の中で最も大きな平地は、荻ノ町飯島の周圍、大體四十町歩もあるべきか。こを少し下りて下田といふ部落まで來ると、對岸はもうすべて薙畑の山なり。住居よりやや遠く、皆小屋を山中に掛けて出作りす。

荻ノ町飯島には城端より移住せし商家などもありて、やゝ世間の風が吹けど、是より又下りて芦倉あたりまで來れば、今もまだ五つ紋の小紬を着て田植をする女を見る。又その着物はすべて手織、男は無地の淺葱の紋付、女は若いのは裾に萩の花を染め、老いたるは浪に燕の裾模樣が普通なり。何れも城端の紺屋に誂へて染めさする。中ノ切に次ではこの飯島の對岸あたりが古風なるべしといふ。加須良(飛驒桂)は之に比べると越中の感化やゝ

田植をする女

多しとのことなれど、行きて見ねば何とも決し難し。

加須良川小白川ともに清流して、梅雨にも少しも濁らず。たゞ水量は平瀬の大白川に及ばざるのみ。溪山の美はこのあたり最も優れたり。是ほど多くの人が入込みて今まで之を說く者なきは不思議なり。

國境小白川の部落に分教場一つ、二間に三間ほどのものを二分して、一方を教員官舍とす。教員は十六七の青年一人、生徒は十人にて此頃全部缺席、以前はたゞ出張教授であつたのに比べると、是だけでも進歩なりといへり。

椿原からこの小白川までは二里、對岸はもう越中なり。越中の民家の屋根も上流のものと大差無く、たゞ破風を正面とした妻入の家を見るのみ。此谷の住民が庄川下流から入つて來たことは建築の特徴からでも推測し得られる。此谷を東に越えると、屋根はすべて板葺きで、先づ木曾方面と同系統と見られ、山脈が二つの風俗を境して居る也。

四階五階の高い藁屋といふのは、分家制限に伴なふ必要からならんも、平地の儉約といふこともたしかに又大きな理由で、日向椎葉村の細長い家と同樣に、土地の人の工夫に基づく近年の改良かと自分は思つて居る。

普通入口に當る所を入つて行くと、左は厩屋で折れ曲つた土間が通り、右手には垂れ蓆が垂れて居て其中をオイと謂ふ。オイには爐があつて其横座には家の隱居が坐る。主人は其次の臺所といふ室の爐の横座を占める。オイから外部に面して高窓といふ窓が切つてある。斯ういふ一つの例を自分は見て來たが、他の家々も大抵は同じ作りかと思ふ。

赤尾は町といへどもやはり淋しい在所なり。たゞ畠の麥の出來はよく、田も少しは多し。今が田植の盛り。雨いよ〳〵烈しくなり、一軒の家を借りて晝食をしたゝむ。此家の田植の飯をよばれる。鍋にて炊いたものといふ。

正午にとゝを立ちて尾瀨峠にかゝる。風强くして傘もさゝれず。山越の間にずぶ濡れとなる。雨具は着たれど腰より下は水漬なり。

峠の中腹以上は雪多し。雪は皆山の塵を被りて、遠くよりは雪と見えず。しかし其あた

りにも谷ウツギはあまた咲き、其かたへに椿も咲きたり。むやみに高い峠なり。草には葉や莖の異樣に大きなもの多し。頂上のあたり風勁くして少し危險を感ず。足は雪水にてつめたく、行手は霧かゝりて見えず。されど峠に裏と表あることを發見して獨り喜びに堪へず。表といふのは其方から通交を求めたことを語るもので、是が經濟生活の方向ともいふべきものを示すかと思へば也。

上梨新道まで下れば始めて人家あり。越中東礪波郡大鋸屋村二ツ屋のうちなり。こゝに少し憩ひて四時過ぎに城端の町に入る。停車場の茶店にて濡れたものを乾す。高岡までと思つたのが、錦小路東宮主事巡檢の混雜を憚りて、金澤まで出てしまふことにきめる。車中睡り制し難し。

六月六日　日よう、雨止み曇。

金澤の旅館源圓に至り、朝十一時まで寢たり。

石原警察部長に電話をかける。衞生會議にて手があかぬとて、高麗十二君といふ警部訪ひ來る。能登への路を尋ねる。

家へ小包、處々へ葉書、日記などを書きて日を暮す。

石川新聞の記者來る。夜は按摩に附近の口碑などを多く語らしむ。鏡花の小說の淵源する所あるを解す。又その言語にも少なからぬ興味を催す。

六月七日、午後晴

早天石原磊三君訪ひ來る。此地で亡くなつた舊友平田德次郎の話を聽き、何か此樣に働くのもつまらぬ樣な氣がする。

しかしなほ八時半の汽車にて、七尾へ行くことにする。石原送つて來てくれる。車中に縣の岩藤技師縣參事會員津幡の河合明氏とを知り、多くの地方事實を學ぶことを得たり。河北郡の海岸はひろ〳〵とした砂地、桃の名所なり。但しズバイばかり、普通の桃の方を毛桃と呼ぶことは播州と似たり。

又薩摩薯を作る。肥料は魚類と粉糠、近來やゝ莨類の植物を栽植して綠肥とす。

索麵を產す。小麥は今日にては附近のものにては足らず、北海道よりも買入れる。

鹿島郡にては杉材は產物の一つとあれど、山にも里にも爰ぞといふ杉の林は無し。或は次々に屋敷まわりのものを伐つて居るのか。

能登部は古府中の地の北に接して廣き臺地の原野なり。所々に新墾あり。此邊馬を產す。加賀は牛、能登は馬と自ら分るが如し。

黨派心は中々强し。何れの村にも必ず役場派非役場派の對立あり。郡役所にも黨人の桔抗が見られる。目下所得稅調査委員の選擧の爲に、烈しい競爭をして居る。

いはゆる陰翳樹除去の政策は効を奏し、はさ木は多く用ゐられ、田の畔の木はよほど少なくなれり。はさ木は乾田を選びて立て、他の田の稻もこゝへ集めて乾す。はさ木の材は栗なら一本三十錢內外、杉は二十五錢位、田の傍で雨晒しにするなれば腐りやすい杉よりも栗の方が多く望まれる。木の長さ三間半から四間、三尺ほどを土の中へさし込み綱でとめる。二本の間にははさ繩を引渡す。風の少ない處ならば六七段も鎧のやうに稻束を重ねて引掛けるといふ。關東でヲダアシなどといふものとは、よほど方式がちがつて居る也。

蠶種は縣內を平均して三〇%の不合格、是は當業者正直にて隱蔽せぬが爲なりといふ。長野などにては生產者まづ顯微鏡にて見、怪しいと思へばよその不用の蛾の無病なのを借りて來て、すりかへて添へることありといふ。法律の不備ともいふべきもの。

七尾に下車。署長郡長を訪ひ、色々の話を聽く。この港木材の輸出少しも無く、又輸入も無し。たゞ先年火災復舊の際、ごく少量を能代より入れしのみといふ。輸出の主なものは米、是は內國向き、輸入は鮮魚といふ類なり。鐵道との關係にて斯かる現象あり。

和倉の和歌崎に行きて泊る。岸本馬政官望月農商務技師などの一行宴遊すときゝて、惡戲半分に名乘つて出て是に加はり、又大きに腹をこはす。馬鹿なことをしたもの也。

六月八日、晴

弱つて寢てしまふ。終日無聊なり。昨夜の小さい娘を一人借りて世話せしむ。大聖寺から來て居るといふ。いろ〳〵かの町の生活をしやべる。

はさ木の材

本を幾つか讀みたり。

六月九日、水よう、雨終日

石油發動機の船に乘りて七尾に渡り汽車に乘る。車夫に繪葉書を買はしむ。

能登の藁屋根は兩側を先づ葺き、前後の屋根は其上に重ねたやうに見ゆるもの多く其の端は農馬の鞍に似てゐる。石崎の蟹の村などは、竹の葉を藁にまぜて葺けり。倶利伽羅の溪谷にも同じ屋根を見る。富山附近の屋根は木曾にやゝ似て瓦を板の上に載せ、切妻の横面には戸も窓も無く、美觀も便宜も共に退歩を示す。この二つの點は白川の方が木曾に近し。つまりは山村の方が住家に力が入つて居る也。東北のやうな鈎の手の家は、縣境の山村にはぽつ〳〵あり。

富山に著き縣廳に行く。行啓の下檢分にて大分混雜。早々に引下る。始めて家信を得たり。

高松屋にとまる。此夜東京外十一市場の木材取引に關する報告書を讀み了る。

六月十日、木曜日、冷氣、

昨日の近藤縣技師案内に來る。農事試驗場に行く途次、監獄に行きて見る。こゝは女囚人ばかり、其中には老尼などもありて凄慘なり、昨年の夏、慾の爲に人を殺した若い女なども、機を織る者の群に居たといふが、よく顏を見ずにすぎたり。

試驗場にてはいちごを出されたり。話多くして一々は記憶し得ず。こゝでは窒素石灰の試驗、又滿淹の試驗などをして居る。田の裏作に燕麥を作り、青刈をして居る。反收量千二百貫に及ぶ。普通の麥は播種の時と收穫の時と、共に稻と重なつて二毛作不能なれば、こゝに新工夫の必要ある也。麥の移植といふことは以前より少しづゝ行はる。斯くすれば稍稻刈よりおくらせることを得べし（稻刈は十月中旬まで）。但し其勞程僅かに一人二畝、通常の麥蒔勞力の外に、更に反六七人はかゝる。幸ひに農家が閑になるから、斯ういふ仕事も出來るわけなり。

紫雲英は大分作る。是と石灰施田との良好なる關係は注意に値ひす。從つて石灰を使つ

麥の移植

たばかりに牢に入れられて居た、天草の農夫を愈ゝ氣の毒に思ふ。

牛は少しも飼はず、馬は平地では五戸に一頭の割合なり。しかも北國は全體に馬耕の久しく行はれて居る處とて、馬は使用に臨んで山間部よりも、又能登よりも借りて來る也。能登は馬處なれども耕耘にあまり馬を使はず。

馬を飼つてゐる農家でも、草が無い爲に不用の期間だけ、之を山村に預ける習はしあり。燕麥青刈を飼料として貯へるやうになれば、通年家に置き使役し、且つ肥料を取ることが出來るわけ也。

試驗場の一區に、生產の全部の藁と糠の外、たゞ燐酸六貫目だけを施す試驗をして居る。人造肥料の連用が次第に效果を減ずることを、感ずる者が多く、之を兩面より確かめて見ようとして居る也。此邊の地下は皆川の砂利、田でも底を塗るやうにせぬと水がもたず。又冬季雨雪多く、肥料は流れて半ば效をなさずといふ。

中學校參觀。校長の話に、生徒が運動を好まぬ傾きあることをいふ。寒國一樣にしかありとも思はれず。何か原因あるか。

縣の勸業課にて少時談話。富山ホテルに行き錦小路東宮主事に挨拶。二軒の本屋にて越中に關する書二三種を求む。小包と手紙とを家へ。

六月十一日、朝曇、入梅の日

八時十分にて滑川に行き、水產講習所一見、瓢網角あみ大敷網などの標本を見せてもらふ。網の染料は此地方は柿澁、又は日向日高の專賣のエキスを使ふ。この方は化學製品なり。

高志丸は九十噸の洋型帆船、昨年六月の新造、今年はカムチヤツカへ鱈釣りに、十五日出帆のよし。所長短期講習の效果多きことを說く。

所長室より南の方に劍山、立山は其右うしろに幽かに見ゆる山の頂是なり。蜃氣樓はこゝより西、氷見の山の裾に、又は東の方生地（いくじ）の端に近く見ゆ。魚津では又滑川の沖のあたりに見ゆ。共に背面は陸地にて、たゞ洋上に見ゆるには非ず。水平線下の松林など浮揚が

り、砂堤の高く上るものは恰も壁又は橋のやうにも見ゆる也。大抵晴れたる日の十時頃から四時頃まで、斷續して現はる。時々變化して離れ又合して倒れなどす。それを昔は人馬の行列などと言ひしなるべし。

中新川郡役所にて、郡長と少時語る。此郡農事講習盛になり。長いのは三十日、短きは七日位。

此郡も耕馬を能登より借ること毎年五百内外、農事の盛りには馬を十二時間も使役す。其爲牝馬は飼へども產育の障碍少なからず。女は馬を扱はず、產馬熱は高からぬ方といふ。

白萩村は大村、地積殆と郡の半分に及ぶ。男子三分の一は夏より冬にかけて柚に出で、大きな金を儲けて還る。燒畑はあれど農作の勞は女子のみ多く之に當る。

一時五十分の汽車にて魚津へ、縣廳の若島君先着して出迎へ、郡役所に伴なふ。郡長及び谷書記に逢ふ。鯛引網を見物して魚市場にも行く。

米穀檢査員は一村毎に一人置く。採用資格を定め多くは隣村人を採る。檢査の外に生產方法害虫防止等、米作一切に關して縣の農政を助くといふ。

三日市にて葛布を織つてゐるといふ話。

六月十二日、土よう、晴

七時前に魚津を發す。

田に石灰を撒くさま煙のやう也。其あとを杉の葉の箒にて掃いて居る。念入りなる農業といふべし。但し是はドロ虫といふ害虫を拂ひ落すにて、石灰だけならば掃くにも及ばずといふ。

戰死者の爲に立派な石を建てつること此邊の風なり。一丈以上の碑もあり。何れも個人の爲なり。熊本縣などはたゞ一村毎に一つの記念碑を立つるのみ。

三日市は景氣よろしき町なれど半分は茅葺き也。此邊から屋根の形かはる。板屋は切妻、茅葺きは破風作り、共に妻を通路に向ける。又板屋の後に草屋を取付けたるもあり。

織物會社見學、以前は木綿織物を主とし、又

經木眞田を試みて共に面白からず、近年二つを合せて經木織といふを始む。內地向きは暖簾や簾の代用の如きものゝみなれど、輸出向きとしては襖紙や壁紙も作る。黑部杉梅などを用ゐたるもの殊に面白し。普通は澤胡桃、是は國有林より年分二百棚も伐出す。一棚は六尺〆ばかり、一尺〆の拂下價は十五錢、運賃が一圓以上かゝる。ドロ柳は山中に多けれど未だ拂下げず、たゞ枯損木など少々を賣渡すのみ。柳谷といふ地名も處々に至りて、土質には合ふらしきも、まだ民間にては植栽を思ひ立たず。山のあなた信濃越後にも野生は少なからず。

經木材は普通七尺に伐る。無疵の部分のみ使ふとすれば歩止まり二〇%位。故にかたはら燈寸軸木の製造をもする。その小規模なるや知るべきのみ。近來檜木のシラタを用ゐて作れる粗布を商人喜び求む。四十センチものといへば敷物用なるべし。檜のシラタは川流しをすれば傷つく故に、遠くより持來ること能はず。

浦山といふは昔の驛家なりといふも、衰へて最も靜かなる村なり。舟見も昔しのばるゝ處なり。石灰原料の石は內山の奥より出し、又泊の海岸へも船で運んで來る。以前よりは產額減ずといふも、なほ盛んになる產業の一つ。

愛本の橋の手前より、黑部川をつたひて上る。內山村の役場に憩ひ人夫を傭ふ。

雪のまだある山に入る。黑部川の水は白みありて、白綠の色をなす。雜畑にはわせ小豆わせ粟などを作る。わせ粟といふは九月節供に餅になる粟なり此邊御影石を斫り出す。山の中腹に段地あり、高處より水を引き田を作る。田の底に藁を敷く作業あり、水持の惡い田多ければなり。

黑雜の溫泉に泊り、小林區署長島田の話を聽く。

林道は是より上流鐘釣祖母谷の二溫泉を通り、大黑嶺の少し南にて縣境に達す。信州大町の小林區署管內北城村の方よりも林道を作る。北城愛本の間十四里ばかり、溫泉の足がかりあれば山越には便なり。山中には林區署の小屋もあり。たゞ三十四五年頃から道作りを始め、今も年々の修理に少なからぬ費用を要す。

水持の惡い田

黒部には檜木は無し。姫小松多し、實測三萬町歩餘、五十餘の林班に分つ、施業案の立ちたるは口元に近き林地のみ。面積十の九は濶葉樹林なり。民林に比すれば土石よく蔽はれ林相はよけれど、なほ到底立派な森林といふこと能はず。

山元の値はネズコ尺〆五六十錢なれど、昔より此山を拂下げて損をせざりし者稀なり。中には重代の田畠を蕩盡せし者も無しとせず。小林區署は能ふ限り保護を與ふれども、それでも損をする者相次ぐ也。それにはわけ有り。

他所から來た者は、この土地の人夫を御すること能はず。此邊の者は冬中の食料を確保したさに、あらゆる良くない金の取り方をする。それを附近の者はよく知つて、始めより官山の伐木は企劃せず。

全體に久しい御立山で、其地積の割には住民の數が少なく勞力が足らぬなり。それで此の如き拂下の不況が續き、幾度かの苦い經驗あるに拘らず、しば〳〵官行の伐木を始めることになる也。林道は溫泉の利用者たちに恩惠を與ふる以外に、この官行伐木の人夫の出入にも、大きな便宜となつて居るなり。此山林を一生の仕事場とする人夫僅かに二十人ばかり、臨時の人夫も是あるが爲に連れて働くなり。せめて常供給の勞働者が百人あれば、官林の經營は失敗せざるべしと島田の話なり。(附記。この島田不正現はれ、程なく失脚す。何か事情ありしが如きも、予が如き新米の役人には、是を見拔く力無かりしは是非なし)。

伐採跡の造林は成るべく天然更新にまつも、ドロ・ケヤキの如く有用の材を助長する事に努む。地ごしらへは出來る限り簡單に、刈筋十二尺に一本、横の間隔は八尺、即ち二坪三分二に杉一本の割、密植しても間伐の收入は無くして、費用のみ餘分にかゝるなり。故に苗と苗との間には雜木を生育せしめ、やゝ長してそれを伐倒す。

ネヅコの實を採りてひま〳〵に撒布す。又竹のさしに入れて土に挿し込む。又桐の實を播く。ドロも挿木及實蒔す。なほ其苗圃を設くる計畫もあり。

現在主として伐採するはブナ、ナラの林なり。是も個人が企つれば引合はず。此邊の海

にて使ふ。櫂は此等の木を用ゐる。荒削りにして山を下る。下駄の歯もブナにて作るが是は弱いもの也。水中に在りては地上ほど早く腐らぬ故に櫂などにはやゝ向く也。たゞ重くして水に沈む故に川流し不能也。皮を剝いて流すことにして居るといふ。

炭燒地の貸出しを行ふ。木の價十貫分十錢内外、燒賃同三十六錢程、此外に竈築立の費用が二十七圓ほど、愛本の橋まで出して七十錢ほどの實費故に、利益は得られぬなり。

林道の材料にはこの二種の木を使つてゐる。又石灰燒きの薪としても之を使はせて居る。

六月十三日、日よう、夜降り朝曇

六時半に黒薙溫泉を立ち、島田君及び人夫三人を伴なひて出シ平の小屋まで行く。色々の木の名を聽く。シナは葉の緣の細かくきれたもの、ハゲシバリは山地の崩壞した處に先づ生えるから、是があれば以前のくづれ地の跡と見ることが出來る。マンサク野生あり、栽培してからの命名では無いらしい。ワサビも椎簟もこのあたりには自然生あり。

鍛冶屋の炭を燒くといふ者、路傍にて露天に火を燃やして居るのを處々に見る。

島田に別れて愛本の橋詰の茶屋まで來て休む。對岸に笹卷きの團子を賣る店あり。取寄せて食つて見る。大きさ親指の頭ほど。

舟見にて車をやとひ、泊まで、濱に出て遙かに越後に通ふ新道を望む。爰を東の限りにして、引返して入善（にふぜん）に向ふ。

入善も昔風な町なり。道の傍に用水の小流れあり、其岸に梅などの花木を栽ゑ、下草にはアヤメ花咲けり。

黒部川の大橋は六百間餘ありといふ。橋から上流には内山の段地見渡され、又鳥阪山見ゆ。この山の西麓がけさ行きし出シ平の小屋なり。

黒部に沿へる村々、流木を拾ひ上げて薪とすることは阿波吉野川の下流と同じ。此木は始めから薪材であつたか。長三尺内外にそろひ、前後丸くすれて擂小木のやう也。乾して六角に積上げ、繩にて圍ひたるをよく見かける。

沓掛あたりの村では、川床地に西瓜を栽培す、名物なり。肥料にはササメ、又は粉糠を

使ふ。糠は一株に二三升も入れるといふ。此邊一帶に一向宗盛ん也。女僧も多く見かける。

新川郡の地名地形は、山川の自由に汎濫せし時代を想起せしむ。著しき傾斜面にて、大川の姿尤もおもしろく見渡さる。雪の山の景色も此あたりは北國の他の區域にまされり。再び舟見の靜かなる町に來て泊る。此町を始め、處々の草屋の上には黄なる花咲く草を生やした家多し。松葉牡丹やツメキリ草と謂つた草に近く赤い莖。名を尋ぬるも知る人に逢はず。

六月十四日、月よう、夜來强雨。

朝八時十一分の汽車に乘る。雨雪山を隱し、風强く雨は車窓を打つ。越中の川々は海際まで早瀨、渡るときよく其全容を見る。けふは皆濁りて、海水の色も十町ばかりは際立ちて見ゆ。富山には下車せず直ちに高岡まで、中越線に乘換へて伏木に行く。射水川は近頃の新工事によつて庄川と分離し、始めて靜かなる濱川となれり。伏木乃ちその川港なり。川口に二つの渡場あり。一つは橋跡にて無料、その下なるは昔から有りて有料。對岸は六渡寺（ろくどじ）と謂ふ。一に中伏木とも呼び、しかも新湊町（放生津）の一大字をなす。放生津とは懸離れて居て、電報など不便多しといふ。

小林區署に行き竹内署長とゆつくり話す。東京の有田氏の手紙をこゝにて受取る。此役所、堀と地上にて約九萬尺〆を置き得べき貯木場あり。現在は二萬尺〆ほどを持つ。青森のヒバと秋田の杉と相半す。ヒバは此邊にては專らクサマキ（臭檜）と謂ふ。

貯木場への輸送は、各大林區署間の保管轉換として記入するのみ。賣拂はすべて大阪署の收入となる。本年はこの轉換をせぬかも知れずとのこと也。上中下等の品を取合せて送り來る故に、下等品が賣れ殘り久しく停滯せり。一見運賃の徒費かと感ぜられる。

木材の長さは八尺、一丈七尺などいふもの多し。この寸尺は支那向きを見込みしものが、不調にて此方へ振向けられしとかいふ。しかし金石（かなは）に見たものにも此長さのもの多かりき。

寸市は杉ならば樽丸とし、又多くは屋根壁その他に用ゐる割板となす。木屑が多く出來て不經濟なやうなれども、外見では柾目の有無も判らぬ故、木性を知るには又便なる點も

ある也。

賣拂は殆とすべて特賣法なり。以前は一口六千圓まで、大林區署自ら決定せしが、改めて一萬圓までとなる。小林區署は單にその指揮の下に引合をなすに過ぎず。木の大小長短節曲りの有無によつて、細かく尺〆の單價を豫定して置く。商人も品物の目前に在るを知る故に、決して買置をしようとせず。從つて一口は多くは五十圓百圓の最小口のみにて、しかも昨年度は十一萬圓の賣上高あり。乃ちこの小林區署長などは、小賣商人同樣の辛勞を經驗する也。

大阪の商人もよく爰へ買ひに來る。名古屋よりも來ることあり。多くは汽車積み、又舞鶴港などへ船にて送ることあり。小舟に二本三本を積んで、射水川の上流へ運ぶ者も無しとせず。

北陸地方は久しく奥羽と木材の取引を爲し來り、一種の消費慣習を養へり。たとへば臭檜(アスナラウ)は名木としてよい普請にも用ゐられ、この他に檜木の有ることも知らず。

現今到る處の植林に檜を杉と共に多く栽ゑて居るが、この檜などもよほど相場が低くならぬと、いつ迄も土地では需要が起らぬだらうと思ふ。

高山では奥羽の木に刈下の市場を塞がれて、山に木はあつても大規模に伐採が行はれ得ぬやうに謂つて居たが、伏木に來て聽けば、船津の木が多量に下つて來て、越中の市價を低くし賣拂を困難にするとこぼして居る。この二つの事情は二つとも多分存在するならん。たゞ斯るかさ高の商品を遠地に運搬することは、出來る限り避くるに利あり。故に地方的利害より見れば、寧ろ今までの所謂保管轉換の方を制限すべきならん。但し商人は自ら買ひて運ぶべければ、飛騨の國有林の經營の依然として困難なることは爭ひ難し。

神通川の川流しは、よくは知らねども少なくとも船津より上流では、よほど六つかしい樣子なり。庄川の方は東礪波郡に青島といふ土場あり。個人が田を潰して造りたる設備にて、用水權に關する契約なども有りて、土場の使用料金甚だしきは一五%にも及ぶことあり。白川郷の木を伐り出す者に不利益小ならず。勿論用水の妨げとならぬ秋季後に流すや

うにすべきも、この私設工場の故障を排除し盡すことは難事業なるべし。

この中伏木の小林區は、立山の兩面から白山官林の東境まで相應の面積あれども材木は乏しく、たゞ年々の薪炭材の雜木を拂下げ、其跡に植林するのが事業なり。但し現在はまだ假施業案なり。葦峅寺と其對岸本宮とには、保護區ありて盜伐を監視す。この上流のみ少々の木はある也。立山登路は葦峅寺より川の右手を登り、歸りには立山溫泉を經て本宮へ降る也。降路殊に險なり。此頃舊道の幽かに殘るを辿つて、この中間卽ち右岸に沿ひ、三尺の歩道を開く。登山者もやゝ之に依るといふ。

針の木より下つて來る黑部川のごく上流の處には、下駄ばきでもあるかれる緩傾斜の谷ありといふ。たゞ黑部の本流づたひには何としても爰に至る能はず。

四時の伏木發にて高岡市下車。雜誌繪葉書など買ひあるく。此町は街路正十字を爲す辻多く、城は停車場を出てすぐ右の方に近く、公園となりて趣致あり。伏木にも小さな製材所ありしが、こゝでも何れかに機械挽きの音が聞えて居る。指物屋の店多く、簞笥などゝ共に白い支那カバンのやうな形の箱をさして賣つて居る。上に牡丹の花などを描けり。

再び高岡六時の汽車に乘り、金澤著。上松原町なる源圓に來て泊る。監獄局長の小山氏同宿といへど面會せず。隨行の松本屬とは逢ふ。播州高砂の人といふ。

メークルジョンの地理の書を讀んでしまひ、町へ出て森さんの一幕物を買つて來て讀む。又雜誌も數種。

六月十五日、火よう、曇、風冷。

けさは晏起す。商品陳列場を見に行く。參考品には名器あり。新しい陶器には形の佳きもの無し。塗物には少しは欲しいものあり。又硬質陶器、藥卷鰤、梅のジヤムまで並べて居る。

縣廳に行き食堂にて一ぺんに各大官に逢ふ。家信に接す。勁吉又猩紅熱なりとの報に驚く。小田内君よりも葉書。

大塚勸業課長遠藤技師などと面談。次に柳原技師の案内にて、農事試驗場と其附屬の蠶

絲試驗場を見學す。先日汽車中で話をした岩藤氏にも再會。

石川縣の絹織物は輸出向きを主とし、目下年產千萬圓以上、是に要する原料の繭二十萬石、縣內の產は三萬石を出でず。しかも製絲業は未だ起らず。其繭まで外へ賣つて、縣外の絲を買つて居る。七八年計畫にて少くとも半量までは縣內の絲を使ふ方針といふ。

そこで桑園の增加の爲、極端なる補助をして居る。卽ち郡からは個人實費の半額を給付し、縣は郡に對して其支出の半を補助するなれど、其額が今はまだ七千圓餘。卽ち石川縣全體として桑畠を造る爲に三萬圓しか使はぬ勘定になる。增加する桑園は林野を新墾する外に、從來の麥圃を潰さんとして居る。麥は田の二毛作の普及によつて、縣內の需要には餘りある筈といふ。安原村などでは甘藷畠を桑園に變へしもの多く、又海邊の松林も開けり。つまりはもう地面が足らぬの也。

秋蠶は此地方のもの質良く解舒よろしければ價もよし。生產期は稻刈の前、草取中耕の終つた後で、勞力の配分には便なり。又桑に霜害の氣づかひも無く、之を發達せしめんとするは適當の政策なるべし。

秋蠶用の桑は魯桑最も適すといふ。いつまでも葉が柔か、春初に一旦その葉を採り用ゐ、夏に入つて再び發生せしむ。普通の桑苗は接穗なれば生產費多くを要す。一本一錢くらゐといふ。近來一種密植栽培法を行ふものあり、一反に五千本以上を栽う。是は魯桑の實生を用ゐ、一本の價一厘五毛、一反に七圓ほどかゝる。普通の桑畠が十五年續くに對して、是は八年位で終るは弱點なれども、其代りには初年より百貫以上の收桑ありといふ。

一つの桑畑にて春夏秋蠶を共に養ふ地方もあれど無理なるべし。合理的計算では繭一石の爲に畠一反と見て可なり。蟻量にして三匁云々。

春蠶は四十二日をもとは普通とせしが、溫度の調節を以て是を半分にも短縮し得る見込あり。以て勞力を省くことを得べし。但し桑の成育との關係もあり、三十日から三十五日位にするのが最も適當ならんかと、爰の人は言へり。勿論短縮は始期を遲らすを利とす。風穴利用といふことの考へられたのも其爲。秋蠶の生產を增加すれば製絲家の爲にも遺繰

の都合よろし。澤山の繭買置をする必要が無ければ也。

耕地整理は一般に費用多からず、一反二十圓以上のもの少なく、三十圓を最高とす。しかも暗渠には非ざれども排水も十分に付く。よほど排水の容易なる土性と見えたり。金澤附近の低地は今や半分までは整理せられあり。

排水せられし田の裏作には紫雲英を奬勵せしが、目下の普及狀態はやゝ過ぎたるものあり。一反の紫雲英は三反の綠肥に當るものなるに、どの田にもすべて之を作つて居る故、窒素過多の現象は稻イモチ病となつて現はるゝことあり。此頃は少しづゝ紫雲英を制限しようとして居る。

始めて知つたことは農民の此邊では麥を食はぬことなり。彼等は麥の栽培を引合はずといひ、米に力を入れたがる。是は米の生産支出には勞力を算入せず、麥には之を算入するが爲なり。自家勞力を普通の勞力市價として控除すれば、小農の純益無きことは不思議には非ず。是は勸業課長の談なれども、米と麥との經濟の立て方に、是ほどまでの差異が果して有るものか。或は麥のみは商品として始めから生産の計畫をするものか。はた又米だけには何か傳來の考へ方があつたのか。心理學上の問題のやうに感ぜられる。

石灰は十年ばかり前、施用禁止の縣令を出し、數年の間に漸を以て之を絶つの方針なりしが、日露戰役起りて肥料の供給困難となりし爲、一時此禁を弛めて今日に至れり。農民も次第に其害を覺りて、極端なる施用を愼しむやうになりたれども、縣令が反に二十貫を限度とするに對して、今もまだ用ゐて八十貫に至るものあり。

人造肥料の市況不振には根本の原因あり。それは其連用の爲に肥效が漸減することに至れりといふ。試驗の大切なる點なり。

能登の燐礦といふは羽咋郡火打谷なり。一時大きな問題になりたれど、元來が含分少なく、肥料製造に供し得るは十五%に過ぎず、中央の方針も他處の人の採取を許さず、たゞ地方的消費に充つるを認むるのみにて、それでは利益も大きくない故に、縣内でも打棄て置く也。七尾に大阪肥料會社、二十萬圓の工場を建てたれど、市場不況の爲に未だ製造に

は着手せず。この燐礦は石灰石なれば、燒いて用ゐようとする者もあれど、普通の石灰石の十貫目三十錢に比して、是は二十錢も高ければやはり引合はぬ也。

能登は馬、加賀は牛といふ話は前にも聽く。加賀にも石川郡などは牡馬ばかり少し居るが、農業の使役にも不足す。此地方では借馬は能登より來ずして、越前大野郡の方から、十頭十五頭と一人が牽いて來て貸して行く。三十日、何程といふ勘定にて料金を徵す。

堆肥の施用は不思議なほど此地方に普及せず。師團の敷藁や馬糞など、請負人ありて拂受け居るも、殆と無償同然にて双方ともてあまし居れり。河北其他の沿海の砂地など、腐植土增加の必要あるべき處でも、とんとこの廉價の肥料を買はうとせず、甘藷に堆肥を使ふと、諸が筋ばかりなるなど〻謂つて嫌ふ。

市の周邊農村の肥料としては下肥が一石八十錢ほど、一石は三荷あまりなれば、ほゞ東京の差配人の收入と同じほどか。

金澤市郊外水田には芹を栽培し、又花菖蒲を作る者あり。前者は一反六十圓ほどの收入といふ。金澤では薪炭蔬菜には、まだ仲間商人の手を經ぬもの相應の賣買あり。もう東京では見られなくなつた現象なり。

農事試驗場の敷地は借地なり。一まとめの大きな土地なれば小作料やゝ通例よりも高く、一歩＝付米六合。富山の試驗場も是と同額、即ち一反に一石八斗といふ。多分毎年米の時價によつて金錢を拂ふならん。

酸性土壤に石灰施用の有效なることはもうきまつたと見て可なり。無差別なる禁止罰則は、農民に對し申しわけの無いものであつた。但しこの邊の田には酸性のもの無しといへり。然りや否を知らず。

六月十六日、水よう、好晴

朝七時半の汽車に乘る。驛にて名古屋の控訴院長藤田氏にあふ。父の舊友なり。多くの裁判官達見送りに來てあり。東西に別れ去る。司法省の山下技師と同車、自分は松任にて下車、榊原技師の案内にて農學校を訪ふ。又郡役所にも行く。

17371

途次千代女の墓に詣づ。吾はこの世をかしく哉の悪句を石に刻せり。

この郡安原村に行き、下福増と下安原との耕地整理を見る。後者は十數年前のもの也。昔の耕地整理は一般に、田一區の面積小さく、爰でも五畝又は七畝を一區とす。此邊吹井多し。さまで水の田無き處にも、小さき石の筒から湧きこぼるゝ水あり。整理には一つの妨げなりといふ。

安原村は夙く村是を公表したのを以て世に知らる。今年はそれから八年目、當時の實行事項なるもの果して幾何の成績を示すや。

それを尋ぬるに答へ得る人少なし。しかし恐らくは住民全數の義務に屬せざる部分には、可なり效果の擧がりしものあるならん。

石川縣にても樹苗圃を多く設置し、苗木を無償交付す。他の縣と異なる點は、こゝでは樹種甚だ多く、且つ濶葉樹をも多くまじへたることとなり。例へば栗・ケヤキ・クヌギ・ネム・など。ネムは河沿ひの砂地を固むる爲なりといへり。

石川郡では年生產高百五六十圓の葛布の傳習所に、年百圓の補助金を給付して居たといふ。今年になつて止む。

金石町を見物に行く。大字一つ小字三十、戸一千餘の海ばたの町なり。錢屋五兵衞が家の址、隱居所は今學校となりたれど、本宅の方は土藏と住居の一半は現存せり。刑場は海岸なり。古松一株あり。

この砂山の內側には米鹽の官庫、及び材木の置場ありしが、今日皆畠となる。海岸は以前見ごとな松林ありしを、すべて伐り拂ひたり。此頃再び熱心に植林し始む。黑松なり。

町長中崎氏は無學なれど見識あり。曾て衆難を排して火葬場を海濱に移す。其爲に植林に賛成する者多くなれり。蒔圃ひをして飛沙を防ぎ、稚松を育てゝ居る。

海岸に漁民の部落あり。塵を棄てゝ居た處やがて小丘となり、之を日和山などゝ呼んで居る。今では掃除法の結果、かゝる簡便なる換土法も行ひ難くなれり。

和船にて今も多量の材木を積來る。產地は本莊・秋田・十三・三厩・小湊、さては天鹽

な松ども。米も藁製品も此邊は値がよくて、輸出には都合惡しといふ。

鐵道開通の以前、敦賀金石間に汽船往復ありしも、長き間には非ず。今は臨時の汽船に更に寄ること無し。

金石解株式會社といふもの、是も中崎氏の經營する所、今より二十何年か前、仲仕の風儀の惡きを改める目的で、たつた千二百圓の資本を以て創設せしもの、次第に利益を見て、今は財産の他に四千圓餘りの積金を銀行に預く。其利子だけでも一割五分の配當が出來るなど〻笑つて居る。汽船の入港無くなりて、海員には平日漁業をなさしむ。其資本に會社の積立金を轉貸せしが、すでに昨年皆濟了る。海員部にも別に積金あつて總持分一萬圓以上、人員は四十五六人、加入金の分割納付を許す故に、追々に新加入者あり、漁業の利少なからず。例へば鯖漁の如き、能登の人から學んで餌の關係上却つて彼よりも利を見ること多し。又共濟の方法を設け、海員の氣風よほどよくなれり。酒もあまり飲まず、ばくちも打たず。小屋には立派な佛壇光り居れり。一體に若い者まで信仰心强し。他の土地では

あまり見かけぬことなり。

中崎氏の談に、難波船は國の寶を守る爲に命を棄てゝも救へ。されど漁業には危險を犯すな。漁業はあぶない職業だと人に思はせては、後を嗣ぐ者を得がたいからと言ひ聽かすといへり。

鐵道馬車にて金澤に引返す。町の助役畫葉書を求めて土産にくれる。

夜石原君話に來る。始めて能登舳倉島のことを聽く。輪島より海上二十里、常は輪島の一區劃海士町に住む者、毎年今頃は一家を擧げて此島に渡り、十月までそこに漁をする。猫も鷄もつれて行く。近年は小學校教員も同行することゝなれり。言語少しく他の土地人と異なり。島に在る方の家が本宅らしく立派なりといふ。穴水字出津邊へ來て、假寓して魚を賣る。家が三つあるといふのもむべ也と。石川郡の山奥、ウシロダニとかいふ處にも、やゝ他と異なる住民ありといふも、詳しいことは知る能はず。

六月十七日、木よう、午前晴

舳倉島の海女

早朝に第九師團司令部に行き、經理部員某に逢ひて、陸軍用地の利用現況を尋ぬ。此師團に屬する土地は多からず、從つて其收入の增殖すべき見込少なしと言ふ。唯兵營の周圍などの從來打棄てありし空地に桐を栽ゑたり、風致は添はりて利益ありといふ。あまり煩細の論のやうなれども、各官廳自ら進みて斯ういふ考案をすれば、無形の效果も少なからざるべしと思へり。

金澤附近の農、厩肥の利用を知らぬとは前に聽く。師團でも處分に困り年々の請負人は必ず損をするといふは奇なり。大阪などでは、一定の清潔手當までも引受けさせて、なほ一頭月四十錢づゝを拂受人より納付せしむ、爰では昨年までは同條件にて一頭に付八錢、今年は僅かに一頭一錢五厘を納付するのみ。燒いて灰にして買手を見つける由。斯ういふのは寧ろ始めより小量に分けて買取らするが可なれども、是には又會計法規の障碍あり。結局は農會が仲に立ち、一方には厩肥利用法を普及せしめ、一方には安く賣渡す機關を作らせて見たし。榊原試驗場長に此事を勸めたれど、一體に此地方は肥料評價の胸算用がちつとも發達して居らず。

三好土木課長と逢ひ、縣が管理する官有地の事を問ふ。此縣では總面積は大きくないが、筆數のみ夥しく各村に亘る。多くは濱地川原などの利用の見込少なき處なれど、中には珍らしい例も無きに非ず。石川郡か能美郡かの或山間の村では、北海道とかへ出稼して不在の間に、租稅不納の理由にて畠も山も沒收せられ、歸つて來て驚いたといふ話もあり。斯ういふのがまだ雜然として處理せられずにあるなり。

五畝一反といふやうな散在官有地は、政策上些の意義も無く、之を無くすれば管理の事務は省かれ、他方之を桑圃植林の奬勵に利用することを得れば更に妙なれど、今日の各課分立の弊は、自分の見た所一つの故障なるべし。

其一例として後に聽いたのは、福井縣で敦賀から福井の方の海岸道路を新たに開きたれど、汽車開通の結果は村民以外に之を使用する者無し。其路傍に漆とか櫨とか、何か有用の木を栽ゑたらどうかと農林の係員は献策しても、土木課は現狀維持を固執して容易に同

意せず。堤塘敷地なども大きな面積なれども、雜草より他には生えて居るもの無し。各課は互ひに相手の專門意見を過當に尊重して、必ずしも强ひて爭はうとせぬのを禮儀とし、部長以上にも是を統一する考へ無し。惡くいへば今日の地方行政はたゞ陳列也。

午後〇時二分にて金澤出發。同行は林業技師遠藤安太郎君。精悍にして才氣ある男。牛村一氏君と同車、松任まで。此人は予に先たちて小濱より舞鶴に行くといふ。丸岡在の篤農山田斂君に予を紹介して置くべしと約す。

小松に著、雨來る。郡の林業技手と營林主事の瀧君も出てくれる。能美郡役所に行き富田郡長に面談す。腹のあるやゝ風がはりの名士、もとは盈進社に在つて活動して居た。盈進社は筑前の玄洋社とよく似たる政治團體なり。

白山山地は今は能美郡に屬す。白峯村の役場まで小松より十二里。冬は雪高くして出られず、却つて山越しに越前勝山へ出る。此間は六里、交通は年中絶えず。牛首の保護區員などは、冬は用無ければ大聖寺の小林區署に引上げて來て手傳つて居る。

安宅の國有林を見に行く。港はまはり路になる故斷念する。此あたり一種のやわらかな石材を多く出す。竈水盤の類いろ〳〵此石を用ゐ、又丸い管にして吹井の井筒とし、土止めにも之を使つて居る。何といふ石の名か。此方面の知識無きを憾みとす。

柴山木場今江の三つの潟、連なりて大なる地積を占む。木場潟のみは鐵道より南に在り。安宅の松林は他の二つの潟の北に沿へり。粟津停車場のすぐ北には石川種馬所あり。構内の小丘に亭をしつらへ、東宮行啓を迎へまつらんとす。三湖一望の裡に入るよし。以前にも三湖臺といふがこの近くの別の岡に設けられしことあり。

飛驒より此あたりまで、村々には昔ながらの高木造りの桑多く、その實はすちようど熟せり。道々之を採り食ふこと、けふも何度といふ數を知らず。

今江の潟の狹き處を橋より渡る。兩岸蘆しげりて次第に土地を作り、剖葦(よしきり)此間に棲みて盛んに鳴く。橋の下を過る小舟の人、瀧君を見てにこ〳〵とし、頻りに乘せてやらうといふ。

官林の入口に少しの海岸松あり。佛國から來た種なるべし。大聖寺にも海に近く、之を栽ゑた處あり。

官林の中に入込みて所々に私地あり、或は一邑落をなす。思ふに法令の寛なりし時代の隱田ならん。耕地多くは畠なれども、近頃國有地を借りて暗渠を通し、潟の水を引きて水田に注ぐものあり。又民家にて軒の下まで官地なる處あり。是には幾分の林を割きて貸與す。盜伐の制裁としては、此關係を利用するが最も有效なりといへり。されど此等の村里にては、他には殆と燃料を得るの手段無し。もし山入を全禁すれば、却つて盜伐を誘致することゝなるべし。故に松の落葉落枝は、一定の條件を設けて地元に拂下ぐることゝせり。

松露も少しばかり發生する。是も拂ひ下げるといふ。何でもかでもつまやかなること也。

合歡（ねむ）は舊藩の時代より、砂山の改良方法として植栽を奬勵し、今も縣にて公けに頒布する樹種の一なり。惜むらくは木の用途全く無し。日向などで見たやうな直立の木は少なく、此邊のは皆低く横に靡いて居る。ネムを海邊に栽ゑしむるは齋藤音作といふ人の考案、その人容貌予に似たりといふ。

文化年間か、此砂山に松を栽ゑしめし時代の記錄縣廳に藏す。遠藤君携へ來りしを一見す。

火藥庫のあつたといふ跡、私地となつて介在す。是にも松を栽う。全體に大木少なし。新たに栽ゑたるも成長十分とは言ひ難し。官林と潟端との間には、又少許の田畠を介在せり。

三角柱ある高處より遠望す。雉子鳴く。新保といふ村にも官林あり。殆と接續すれども是は江沼郡に屬す。林相はほゞ同じけれど、やゝ高くして幅狹し、入野ありて奥深くまで田を作る。西に進むほど次第に山地の感を加ふ。

桑山湖見え、水を隔てゝ片山津溫泉の白壁見ゆ。つまらぬ四層樓、水に映じてうつくしく見ゆ。地は篠原に近し。實盛の塚などあり。爰にて雨に遭ふ。折から岸を離れんとする遊船を賴み便乘す。森本旅館の女二人と客二人、一人は入墨をしたる四十餘りの男、郡山あ

たりの料理屋の亭主か。鼻の兩端が缺けてあり。

此渡も岸低く葦と眞菰茂れり。菱無數に生じ、水中にその細き莖絲筋の如く見ゆ。花はまだ蕾。鳰鳥多く遊べり。雷鳴りはためき驟雨大いに來る。越前境の山に濃き雲あり。

埋立をなせる土地二町ほど、工事まだ半途、爰より湯は涌くなり。例の石の筒の大いなるを伏せ、竹の管を繼ぎて町へ引く。大きな宿屋は内湯を作らんと計畫す。

森本の別館に泊る。隣に三味線を彈く。夜に入り大聖寺の小林區署長菊地喜太郎君來る。四十五六の人、林學校の第一期生、五年の科程を四年にて出で、師範學校などを敎へてありし。文學を愛好すること我等に過ぐ。めずらしく趣味の豐かなる人で、人柄もやさしく若々しい所あり。

六月十八日、雨後路に露滋し。

朝七時頃爰を立ち、潟に沿ひて西北の岡を登る。道に油桐多し。此木は若狹丹後までも分布し、彼地にてはコロ木といふ、但馬考にも其名見ゆ。油を搾り粕を肥料とし、材にては下駄などを作る。花は五瓣の白、徑三四分にて中は紅色なり。先年小濱の水産學校長とこに來てありしが、この油桐林にて自ら縊れて死すといふ。その木も見たり。

楢は栽後八年にして伐り、それを五回くり返し四十年にて林を更へる。

菊地遠藤龍三名と共に、片山津より半里ほど西の松林の官行伐木を見學す。此邊の勞働者加賀越前の者多けれど、良き杣は能州より雇ふ。斧は使はず、すべて大鋸なり。土地平なれば鳶口もあまり使はず。

爰にて菊地君と別れ、殘りの三人にて動橋の停車場に出づ。人力車で那谷の觀世音に詣づ。那谷はナタといふ。谷はすべてタンと此邊の人はいふ樣なり。繪葉書には誤つてナヤとあり。有名な寺、形の奇なる巖石多し。山崖をきま〳〵に切り窪めて堂を建つ。山寺達谷の亞流、俗衆を驚かすに足れり。門前の人家に此奥より産するオパールを賣る。價高きこと非常なり。又近くに瑪瑙を出す處もありといふ。

村役場の人が案内して、高處に上り遠望す。四山さして高からず。法王山は華山院法皇油桐多し

隱栖の地とて、其御陵といふのがあり。他の山々は見ゆる限り皆是より低し。かなた面は大杉谷今も杉の産地なり。やゝ下流に日用といふ處、亦杉苗を多く出す。田にて仕立てたる苗なり。近頃漸く粗惡となるといふ。

海岸の方は平遠にして、能美江沼の農業地を隔てゝ、遙かに瀨越の砂山を望む。砂山の色は赤く、其の他には禿山なし。土質にもよるならんが、大體に中國地方よりは樹多し。越前の東部殊に然り。

那谷村は大字四つ、山野はすべて村持にて、割りて住民に使用せしむ。割り方は少異あれども、何れも田に屬して權利を移轉す。一反に大抵一口、一口は臺帳面積にて四五畝あり、繩延びは二倍三倍もあることと珍らしからず。反對の表意無き限り、田を賣れば山は之に伴なふ也。

再び能美郡に出で、溫泉ある粟津の村を過ぐ。小山の裾にて趣無し。停車場は粟津の名あれども別村、こゝまで馬車にて行く。道々田は植ゑて久しく、今や石灰施用の盛りなり。此邊も牛はもうあまり見かけず、越前大野郡から馬を借ること石川郡も同じ。

停車場の前は念佛谷の國有林といふ。ばらばらと少しの松あり。種馬所の爲に一部分を削らる。こゝに苗圃を設く。もとは林業試驗場にするつもりなりしといふ。

瀧君は歸り去る。別れに臨み其子の事を言ふことと切なり。出來のよい子を持ちたる親は皆斯くの如し。寸時も忘れて居ることが出來ぬと思はる。

大聖寺に下車・郡長署長など大規模の出迎、上山山林局長來ると誤聞し、宿は十人の支度をしたとのこと、郡書記某君同行して直ちに山中の溫泉に行き、吉野屋の別莊にとまる。村の助役吉田といふ謹厚なる老人來話、久しく長野縣に奉職し、乘鞍鑓附近の山地の事情に通ぜり。山岳會創立の話を聽いて大いに驚く。

この村はよく採める村にて、今も村長無し。僅かの田畠ある外に、千二百戸は町民といふ感じにて生活せり。此頃工藝のやゝ起りたるは幸ひなこと也。九谷はこゝよりは五里ほどの山奥、今は竈も無く、陶器は山代と山中と二つの溫泉場にて作る。金澤市中にも之を

造る家あり。

大聖寺からとゝへ來る路にて始めて見たる民家の屋根、大分東京周圍とはかはれり。棟は正面と直角にて、前後の端形狀を異にす。予は假に片破風造りと呼ばんとするも、他に何かよき名ありや否。この形式は越前も福井近くまでは續けり。菊池君などは、藁屋は破風を正面とすべきものと思つて居たといふ。或はさうであつたかも知れず。

六月十九日、土よう、雨終日。

八時頃に宿を出でて轆轤細工と漆器の工場を見る。轆轤は細き線ある見事な木地を出す。漆器には質を土器に模せるものあり。予が見たる家の若主人は美術學校の卒業生といへり。

新家熊吉といふ人の自轉車リムの工場を見る。つまらぬ職工より一人で仕上げた男、非常に得意にてをかしい位なり。一月に三千組を作る。材はモミヂとシデノ木。今は白山の麓より、一尺メ五圓ほどにて材料を買入れて居るも、やがて乏しくなるべきかと思はる。

大聖寺に引返し郡役所に立寄る。古九谷の佛像を觀る。今は郡有財產、首も手も別々に燒いたもの。

小林區署に菊池氏を訪ひて後、郡の管理せる縣苗圃を見に行く。一町歩足らずで專ら杉檜松。連作を忌むとて屢々畠をかへる。厩肥は害蟲の虞ありとて爰でも使はず。果して然りや否。此縣は能登の火打谷と能美郡の二俣とに大いなる苗圃を直營する外に、郡毎に小苗圃を設けて郡をして管理せしむ。直營苗圃のみは杉檜以外、七八種の濶葉樹類の苗をも配布する也。

町の西はづれは青樓の地なり。大聖寺の遊廓といふ意味にて、瓦斯燈に聖廓と書せり。大聖廓然といふ文句を思ひ出して一人で吹出す。町古く道具屋多し。

鹽屋に行き郡役所警察署の連中の網曳の遊山に加はるつもりなりしが、この雨にては興無からんと思ひ、汽車にてすぐに福井に向ふ。

牛ノ谷の縣境のトンネルを越ゆれば、山には杉を植ゑたる處多し。縣の奬勵もありしならんが、人民も古くから山地の利用法を攻究して居たる也。

福井の停車場にて縣屬河野君へ引渡され、菊池氏は爰から歸つて行く。ルネ・バザンの英譯レデムプションを此人に禮に贈る。

夜池松內務部長話に來る。此縣は木ノ芽橡ノ木の連嶺を境として、南北の地形面白きまでに相反せり。嶺北は百川一に歸してすべて三國の海口に注ぎ、從つて平野連れるに反して、嶺南は山勢櫛の齒の如く、海曲多けれども川は短く、各郡各鄕必ず丘山を隔つ。人情も相通ぜざる點少なからず。

織田村は丹生郡なり。織田瓶とて大いなる甕を產す。山路搬出に難し、小舟海路より敦賀に送るべし。近來やゝ改良に向ふ。同郡西田中は村なれど、幸若の本居として古くより聞ゆ。郡役所もこゝに在り。

南條郡では杣山は國有林なり。之を縣に拂受けんとして未だ成らず。

旅宿名和屋實は繩谷なり。足羽川に臨めるさつぱりとした座敷なり。庭は僅かなれども大木の松あり。

六月二十日、日よう、晴。

早朝林業技師諏訪卯三郎君來る。外貌の極めて傀偉なる男子なり。次で舊友手塚君も訪ひ來る。

八時四十七分の汽車にて再び大聖寺へ引返す。諏訪同行。手塚君も金澤へ行くとて往復とも同車す。

遠藤技師淸水技手、菊池君等驛に待合はせ、直ちに大聖寺川の舟に乘る。郡役所の側が乘場なり。舟には瓦斯發動機を取付けたり。舵取は船主の代理人なるが、引渡しの爲に來れる造船所の技術員と、やかましい談判をなしつゝ川を下つて行く。

此川屈曲多し。城の防備の爲に特に付けたる屈曲なりと稱すれども信ずる能はず。こゝも古い潟の跡なり。川口にて北潟と連なる。北潟はもう越前の地なり。

瀨越に上陸す。百戶あまりの靜かにして且つ裕福な村。大家七平廣海仁三郎の居村、二人軒を連ねて住めり。其他の住民も北海道に住來して豐かなる生計をなす者多く、村にし

て町の習氣あり。

村はづれの神社、門に錠を掛けたるは珍らし、裏門か。保安林の松林あり。是も昔雋志者の栽ゑしもの、之を過ぐれば海見ゆ。例の合歡の木茂れり、蔓荊も地を匐へり。是より外は遙々と砂濱なり。すべて官有地、之を拂受けて植林せんとする計畫ありといふ。

鹽屋の役場に寄る。其背後の某といふ家にて晝食。此家は船主にて北海道に往來する者なり。村長は金澤人にてもと縣官、それと今二人、名を聽かざりしが顏役ともいふべきたくましき男と、案内して海口を見せる。兼て用意ありと見えて專ら土地の利害を力說す。煙に卷かるゝのみにてよくは呑込めず。

大聖寺川の川口は、對岸すでに越前坂井郡なり。北潟の水これに通ず。北潟は口の處にて一旦狹まり、其外に吉崎あり。即ち吉崎道場の古址なり。今も兩本願寺の別院ありて、其構へ城砦の如く、近國の參詣多し。加越二國の堺はこの吉崎の町中に在り。東に寄つた數十戸は、加賀江沼郡三木村に屬す。殆と堺を劃すべき線無く、簷を連ねて互ひに隣縣人なり。

吉崎の西なる狹處を横ぎりて土堤を作り、水は其兩端僅かなる橋の下を通り、又對岸の濱坂村を隔つ。此土堤は福井藩の事業なり。斯くして大聖寺川の逆流を防ぎ、潟の奥に大分の田地を開き得たり。されど其結果としては、吉崎の下へは海船海魚入り來らず。鹿島は完全に陸地に括り付けらる。此道を今も新路と謂ひ、その兩側はなほフケ田なり。加賀の三木村に編入せられ、瀨越村の者も來て作る。鹿島と濱坂との間は僅かに水通ずれども、昔赤鱸が入つて來たといふ潟には、もう少しも海の魚は捕れず。但し是をすべて潟の堤塘の結果とする顏役君等の說はどうかと思はる。

鹽屋は勿論吉崎の鹽屋なるべきも、村居必ずしも古からず、一名を堀切港とも謂へり。大聖寺川は老齡、港口を埋むる土砂は此川の流す所に非ず。東方一帶の砂濱より吹付くる也。從つて堀割の浚渫は効無かるべし。予は切に地内に多く松を栽うることを勸めて置けり。

海岸より見れば、一帶の直線に岬の陰も無し。されば折々難波あり。二十何年か前には、

村の漁夫百人以上、海口にて舟を覆へし、一人も助からざりしことあり。村民の欲望は決して過大ならず。漁港にして時々小汽船の入來と避難とを容易ならしむれば足るといへり。しかも加賀平野の產物は、この川又は陸路にてこゝに集散すべく、後地は敦賀小濱よりも遙かに廣し。たゞ三國に近くして、現在の便利は彼に及ばず。つまりは地方費の事業なるに、利害は二縣に及び、福井側は之を省みざらんとする處れあり。大體に二縣とも、縣官はとんと此土地のことを知らず、住民の不滿は理由あり。

鹿島の上から海上を望む。此海口は常に舟を通ずれども、少し荒れると忽ち砂に閉さる。辨天島との間は岩で續いて居るが、時々は潮が越すことありといふ。口吟

よし崎の須賀の若葦をりはへて遊ぶ日も無き旅のものうさ。

村の人々と其吉崎の堤の上まで來て別れる。爰で石川縣の人々と緣が切れ、諏訪君とただ二人になる。但し菊地氏は此潟の國有林まで同行す。

濱坂を過ぎて丘の上に憩ふ。ここより北潟を見たる景色大いに佳なり。頗る種板の盡きたるを惜しむ。

此國有林は松も大きく、丘起伏して風趣あり。海に面する一帶は、前任者無謀に皆伐して荒れて居るといへど、爰よりは見えず。林に入りて松の根株を掘り去る者あり。是のみは制する能はず、又土を取去る者あるも、實際は損失微小と目せられて之を罰することは能はず。

官林の木材は北潟を筏として大聖寺川を上り、例の郡役所河岸より停車場まで運び入る堀切港は使はず。

三國一見の爲に蘆原まで出たれども、今日のうちに福井に歸り難からんかと思ひて見合はせたり。此溫泉の紅屋といふに寄りて浴す。よき座敷なり。是ならば福井に歸るに及ばざりしに殘念なことをしたり。

金澤の驛に出て七時半の汽車にて福井へ。

六月二十一日、月よう、雨

松の根株

殺平候詩の試農場を見學する豫定は雨によつて中止。山田農學士といふ人全力を注ぎ、其爲に果樹だけは、試驗と傳習との事務を、縣の方ではせずともよいことになつて居る。

縣廳に行き、先づ手塚野口の二事務官に逢ひ、又土木課地理掛の小林氏の話を聞く。官有地九百町歩餘、一萬町以上の道路數と溝渠は、この書籍の外なることを始めて知る。狂瀾なことなりき。

知事部長その他の人々と共に食堂にて酒ふ。

午後は農學校を行きて見る。

雨の爲に妨げられて十分に見てまはらざりしも、この樓上より坂井吉田二郡の平野を遠く望む景色は心地よし。

加賀の鍬は木を用ゐず、唐鍬を平めたるやう也。越前の鍬は木の臺にさす。

校長出田新氏は古い札幌の農學士にて、植物病理の學者なり。この人の他に今一人の昆蟲學者ありて、學校を特色づけ居るは面白し。縣より頼まれて害蟲の標本をとしらへ、各町村へ配付する仕事などもして居る。出田氏の英語の讀本は、農學校用として專ら科學方面の材料を集め、一風かはつた面白き體裁なり。國語の方でも補習學校乙種農學校などの讀本は、どうか皆斯ういふ風にして見たし。なほ出來るならば低級實業學校の教科書類、一度目を通して見たいものと思ふ。

農事試驗場にも寄る。此縣のは縣農會の附屬なり。敦賀郡の試驗場なども郡農會の附屬、それ故に規模やゝ小さきかと思はる。こゝでは種禽配付の事業に力を入れて居る。

牛乳を出されたれど、雨の日とてあまりがぶがぶとは飲めず。この構内には農産館あり、陳列品まだ貧弱。果物は瓶に入れたのは色も形も味も共に保存すること能はず。何の爲に並べて居るのか趣意不明なり。

工業試驗場にも寄る。東宮行啓の準備として窓掛を織る。しかし多く織つて居るのは白の羽二重のみなれば、米澤の模範工場ほどは美しからず。こゝで八王子の染織學校長と逢ふ。技師伊勢鐵三君案内。

旅宿へ山田歛氏訪ひ來る。丸岡から一里ほど南の村の大地主、農業熱心家にて政治に携はらず、名望のある人なり。中村君と親し。

五嶽樓に行き夕食、池松手塚二君も一しよ也。足羽川の流れを望む高處、眺望ありと雖も夜に入り雨降り、たゞ市の灯火と近き山を見るのみ。五嶽といふは春嶽老侯の命名、自分も一嶽に加ふるよし記文あり。こゝには旗亭多く、濱の絹商人などのよく遊ぶ所なり。俚稱は山といふ。頂上に大迹王子の石像あり。粗末な出來のもの、繼體天皇と言はずに、王子の御名をいふはかはつた思ひ付き也。神宮の方では同意せぬ好みなるべし。夜十一時過ぎまで池松君と話をする。山田氏は終列車で歸つて行く。

六月二十二日、火よう、晴

八時十八分福井出發、手塚兄送つてくれる。諏訪君是からずつと同行。

鯖江下車、今立郡役所の窪田書記出迎へ、三人にて人力車を列ね河和田の村に行く。途中鯖江から二十町ほどの處に、縣立の大なる樹苗園あり、一見。

河和田の村役場に立寄る。村吏員皆若い人ばかり、軍人あがりの集合勢力と見えたり。今日は舊の五月節供にて、漆器轆轤の工場皆休みなり。大山片山小さき講習所あり。そこに立寄りて輪島より聘せられたる沈金の教師と、金澤出身の圖案の教師とに逢ふ。製品も取集めてあまた見せたり。

縣の漆器産額二十萬圓の中、十一萬圓は此村より出づ。褒賞用の木杯はすべて此地にて作る。以前は片山塗と呼びしが、今は小坂にても又郡の某村にても追々に作り始めたり。

原料は角物は主として銀杏、椀は縱目横目とも、椽(とち)もあれどイタギ、ケヤキなどを使ふ。イタギはイタヤ楓のことか明かならず、又イタギリとも謂へり。是等はすでに原料の缺乏を告げ、轆轤組の方は苦心し居れり。大野郡境に近き池何とかいふ處より、荒ごしらへをした物を取寄するに、十一里を二日程なれば、一人百箇として一圓以上の運賃につくといふ。

役場にて晝食、ビールの馳走になる。歸途小坂にて小さな二つの工場を見る。此村は漆

搔きの根據地なり。昔は近鄕を合せて毎年二千人以上の漆搔きが出て行き、到る處にて木を買ひ其地にて搔いて賣り、村へは持歸らず。村の漆器には國漆とて、近郡のものを買入るゝ、是だけは今も同じことなれど、たゞ多分の支那漆を交へ用ゐるのみ。

漆搔きに出る者、此頃は三四百人に過ぎず、それさへ利益少なしといふ。總體に諸國は漆の樹少なくなり、こゝに一本かしこに二本と見つけて行くなれば、八年木一本にて利益三錢、從つて木の收入も低く、桑に負けるといふは事實なり。此附近にても漆樹さして多からず、大いに新植の必要あることを感ず。

野岡は好き町なり。節供にて男女外に出て遊ぶ。家々に生鯖を燒いて賣つて居る。粟田部は野岡よりも更に大きな町、郡の中央部の市場なり。越前奉書の產地岡本村五箇は、粟田部に接して岡の麓なり。五箇といふは定友を始め五つの舊村より成るを以てこの名なり。古くよりの工人村に住む。近頃大いに機械を入る。手漉きなれども他の準備作業はすべて機械なれば、容易ならぬ固定資本なり。堅い鳥の子のやうな紙、昔風の檀紙奉書の類は、今もなほ家々にて作ると見ゆ。僅かの產額のよしなれども、實に美麗なる日本紙を見たり。色は外國にては少しついて居るのを好むよし。耳なども斷たずして送る。骨董的にハンドメードを喜ぶ也。原料はパルプと三椏、又藺草をも使ふ。三椏は駿河より來る。若狹よりも大分出す。今年は美作邊よりも買ふといふ。若狹は熊川村の河內など。

武生の町見物。汽車以前にはよほど賑はひし町なり。事情越後の三條などと似たるか。近在の麻布を染め、蚊帳を仕立てゝ多く出す。又漆搔鎌を作る。古來是が大きなる產業、又他の刄物類も產す。今も裏通には鍛冷屋多し。

柳屋といふに憩ふ。丹生郡役所に電話を掛けたれども誰も居らず。爰にて鯖江の窪田君を返す。池の鯉に澤山麩をやる。

汽車日野川を溯り、山狹く段々淋しくなる。又雨降る。兩側に松山多し、鯖江あたりより杣山の古城跡見ゆ。國有林なり。

この邊の藁屋のグシは、兩端同形にて且つひら入なり。破風はあれども板も張らず、行

抜けなるが多し。高い處から見れば、突抜けて向ふの青空見ゆることあり。

隧道を出ると突然に海岸の山の上なり。見おろす限り渚の村まで、遙かに數百階の棚田あり、更級や田毎の月は物の數ならず。水皆白く光り海うつくし。

やがて杉津の停車場。風流を解する人此季節はこゝを過ぐれば、一列車くらゐは遊ぶべき處なり。但し下まで降りては見どころ却つて少なく、且つ登つて來るのが容易でないよし。

敦賀の停車場は新たに引移り、飛んでもない荒野の中に在り。町まで半里。今宵の宿主熊谷の主人、迎へに來てくれる。

夜敦賀郡の書記宇野氏來訪。この人は若狹三方郡鳥濱の人、色々話をして、私の言葉が三方郡の方言ですといふ。なつかし。

六月二十三日、水よう、朝のほど雨

こゝの保護區の營林主事竹中君を伴なひ、諏訪と三人にて粟野村へ行く。役場にて村長を待つ間、近くの郡農會試驗場を見る。園丁の案内、藤井といふ技手居るよしなれども居合はさず。玉菜火焔菜玉葱トマトなど、西洋蔬菜の立派なものを試作す。浦鹽へ行く船はいつも空船にて往來するなれば、此附近の園藝は甚だ望みあり。肥料は隣の憲兵屯所の厩肥を利用し金肥を買はず。

村長の案内にて國有林を見に入る。黒河といふ三千町餘の處、近江若狹に續けり。行政訴訟にかゝり、數日中に判決ある由にて林區署も手を著けず。營利主事山下某あれども、無事に苦しんで居る。

粟野村には十三の大字あり。長谷以下八つの大字は各々村持の山あり。山税を納めて薪秣を採りし證據あるに由つて、土地は部落有となる。大字「山」に屬せし黒河のみは、他の四大字と入會にして、且つ一部分を近江の野口といふ村に卸山としてありし爲、村有の證據十分ならずとて國有林となりたり。五大字の入會といふより外には、山税の關係等、他の村持山と少しも異なること無しと稱す。

村長附げて曰く、しかしもし下戻法などが出なかつたら、あれでもすんだの也。行政訴訟を許さなかつたらあれでもよかりし也。つまり法律が悪き也と。此法律の根本には、辯護士の事業熱があつたとのみは確かのやうに思はる。

此事件には下請人あり。行政訴訟の入費を、自己の危險に於て支出し、其代りには勝てば此土地の大部分は其者の有に歸する也。怖るべし。村債などは一文も起しませんと、村長飛んでもない自慢をする。

辯護士は又勝訴の上は、保安林の箇所を除いた殘餘の、半分を禮にもらふ約束をして居る。理非は別にして、予は切にこの訴訟に國の方が勝つてくれなくては困ると思ふ。

諏訪君は、判決によつて村が勝てば、縣では即日造林命令を下すと言つて居るも、それも出來るか否か心もとなし。區即ち大字は、財産の全部處分も出來る故に、造林命令を逃げることも容易なり。但し福井縣にては區有財産の處分には知事の認可を要す。しかもこの認可を強要する位の政治力は民間人にも有る也。問題は一に彼等が正しい事がすきか否かに歸着す。

カイトヤマ（垣内山）といふ語を村長の口から聽く。是は里に近い山野のこと也。

歸りに長谷なる保護區官舍に立寄る。大きな松山の中にて寺のやうな趣あり。以前小林區署ありし處、苗圃のひどく荒れたるもの爰に在り。その苗圃で捕つたといふ雉子を御馳走になる。うまし。村長も亦村の辨當を食はせずば止まざらんとす。尤もなること也。

敦賀は水の良い處。家々の前に噴井あり、心持の好い町也。

熊谷にて小憩の後、水上警察に行き署長に逢ふ。其案内にてランチに乘り、金ケ崎城址の下を過ぎ、灣を横ぎりて常宮に行く。近頃金ケ崎の月見館のあたりにて石棺を掘り出す。中に劍と鏡とあり。宮内省の沙汰を待つ間、巡査一人毎日山上に立番す。

靜かなる入海、西と北との風には全く安全なり。常宮に近くまで鐵道を延ばす計畫あり。よき泉よき松、この濱のみは花剛石の砂といふ。水近き拜殿の端にて憩ふ。二十八年の大水の前までは、欄の下まで浪が入つて居たのが、今は十町ほど渚が遠のいて居る。

朝鮮の古鐘を見る。銘文といふものを研究して見たくなる。形は尾上の鐘と似て居る。上に筒が通じて居るのが特徴。

歸りには松原村の松原に上陸す。昔の松原客館も此あたりかと思はれ、懐古の情しきりも也。こゝも國有林、其一部分を縣が十年づつ借りて公園とせり。竹の皮卷煙草の吸口散亂す。耕雲齋一團の墓近くに在り。參り得ずしてかへる。

此村と敦賀との境に最も小さき潟あり、地圖では口が海に通じ事實は沙堤に塞がれて居る。今暗渠工事中。

氣比神宮に詣で、稚兒の爲祈願す。宮の後の川は海に近く、濁つて溝のやうなるに今もまだ鮎を釣つて居る。

外國船が二つ出て行く。一つは名を知らず。まるで空船、今一つはガベナァエシュケ、客三人と三百噸の荷物、補助航路なる爲此の如し。

敦賀名所記を買つてもらひ讀む。

六月二十四日、晴、雨ときゞ

早朝敦賀を立つ。昨日の道を粟野へ、兵營の前を過ぎて國境の坂を越え若狹に入る。濱手の松原にて雨に遭ふ。道にて枇杷を買ひて食しつゝ少しあるく。河原市といふ處まで、三方郡書記某出迎、こゝで本道から右折して早瀨に行く。

早瀨は三湖の水の海に入る所、久々子湖と海との間、三四十間ばかりの長さが川なり。橋一つ、橋の東の詰には學校と魚市場、西の詰に三階の茶屋二軒、橋の上から久々子湖を見た景色はよし。

早瀨には漁業もあれど、村民は鐵製稻扱器を賣りに、諸國へ出て金をまうける。郡中の人々の來ては酒を飲む場處ともなつて居る。

舟をやとひて三湖を渡る。久々子湖邊の丘の上には、處々に果樹園あり。雉子しきりに啼く。小舟一つ引汐に乘りて行くこと迅し。枇杷を積み、又紺がすりの娘を乘せたり。娘手拭をかぶり、氣どりて其端を口にくはへたり。

久々子はもと中湖(水月湖)と通ぜず、寛文年中に郡奉行行方久兵衛この堀割を實行す。幅三間半で狹かつたのを、今度更に擴げて七間とす。上中二湖の岸の田百町、是が恩惠を受く。地主等水害豫防組合を作つて此事業を企て、費用の七〇%は縣が之を補助したり。堀割の土を以て久々子湖出口の兩面に埋立をなし、今年始めて田植をしたといふ。

中湖は大よそ二つに分るゝ形にて名も二つあり。しかし半島にて遮らるゝのみにて水を通ずる區域廣し。之に對して上湖と中湖との境も亦半島なれども、よほど狹く川のやうになつて居る。三方の町に往來するには之をまはると迂路なれば、半島の頸部に地圖には見えぬほどの堀切を作りて舟を通ずる也。このカナル、兩側に樹あつて凉しければ、日中には湖上の舟、すべて爰に來て晝寢をする習はし也といふ。

湖上に藻を採る。藻の種類も三湖少異あり。海潮の通ふは久々子のみ。上湖には菱しげり花咲き、鳰鳥鳴くこと片山津の湖に同じ。

海に寄つて別になほ一つの小湖あり。日向(ひなた)湖と謂ふ。隧門にて中湖と水通ず。

常神の半島は行きにくい偏土なり。郡吏も年にたゝ一度ぐらゐ行くのみ。是へ越ゆる路を鹽坂越と書きてシャコシと呼ぶ。播州赤穗の港にも坂越あり。是もシヤクシ、今はサコシともいふ。文字と關係無く何か共通の意味があつたか。他にもこの地名は折々聽く。

中湖を東西に分てる半島に豚を放牧す。米國還りの男、村持地を借りて經營する所といふ。以前は常神の岬に近き龜島に、十二頭の豚を放せし者ありき。絶壁なれば墮ちて死せしものか、後に捕へ得たるは只一頭にて、重さは四十何貫とかありしといへり。是は精確に言へば放牧にはあらず。天然への送還なり。しかし野猪に近くなり。うまくなつて居たことゝ思ふ。

湖畔の山に松杉の植林あり。久しい以前より今日のやうな補助政策は行はれたりと見ゆ。是よりも更に古い松山も保存せらる。氣山村の金持の所有、近頃陶器業を始めて失敗し、其一部分を伐りたりときく。

上湖の岸には、油桐と櫨とを交へ栽ゑたり。櫨の木は是より西に行くほど次第に多し。

豚を放牧す

桐の實は五斗を一俵とし、一俵より七升から九升の油をしぼる。一俵の相場三圓を上下す。油粕は肥料として早く腐るからとて愛用せらる。搾賃だけは粕から取れる。材は下駄にする。櫨の方は材も用をなさず。西津竈でないと燃料にも使はれず。

上湖の西南の岸には、寛文掘鑿の爲に大分の田が出來たり。鳥濱はもと舟著きなりしに、湖面との間七八町を隔つるに至れり。

生倉に上陸して郡の苗圃を見る。こゝも杉檜ばかり。利右衞門方に憩ふ。鳥濱の豐かな村、目の前に見ゆ。茅にて編みたる衝立あり。絲を少くし緩めて、南京珠を所々に通したり。微風にも波たちゆらぐ。或寺の僧の工夫したる土地の內職のよし。

此あたり田のへりにはハンの木を栽ゑたり。たけ低く頭茂りて田の蔭になるべきも、まだあまり伐られず。田の蔭になるといふ理由で街道の松並木を伐らうとする計畫あり。地價を其爲に低くはしてないからなどといふも、別によくない動機がありさう也。

三方にて人力車をやとひ小濱に向ふ。雨强くなつて路傍の茶店に晴間を待つ。安賀里といふ村なり。繭商人が來て澤山の繭を買ひ集む。製絲工場この近くにも在り。

此邊では藁屋の破風には板を張り、それに水といふ文字を彫り拔きたるもの多し。

國分を過ぎて遠敷村、若狹姫神の御社に詣づ。彥の神の宮は是よりなほ十五六町奧なりときゝて、え詣でず。門前の町に瑪瑙細工をなす家あり。古くからの事なるべし。此店に北海道檜山小林區の瑪瑙公賣の告示が貼付せられて居る。何と無く興味あり。

玉造る若狹の國の國なかに神代の神ををかむけふ哉

とこしへに並ひていますわかさ彥わかさ姫こそうらやましけれ

昔の今富莊は此あたりと思はる。府中は北川の岸なるべし。遠敷郡にて三方郡境より北川流れ、丹波境より南川流れ下りて、小濱の士族町雲濱にて落合ひ海に入る。北川の作れる平地が卽ち國府の置かれたる一帶の美田なり。

小濱の淸濱館主人、南川の橋の上まで出迎。旅館は海軍の人々來り宿し、海の見らるゝ室は得られず、又大しけにて海の景色もわからず、たゞ想像するのみ。

弟の同級の三宅少佐も來て居るとさいて知らせる。やがて遣つて來る。郡役所の加納書記も來話。この人小濱藩士やゝ舊事を記憶す。

六月二十五日、大雨、終日海荒る。

朝遲く起き出し、縣立水産學校を見に行く。此學校は同種の中で最も古いもの、文部省の規程もほゞ此學校の急ごしらへの學則に依りしものゝ由にて、是に基づく學校多くなり、今となつてはやゝ自繩自縛の姿あり。又所在やゝ縣の西端に偏する爲に東部の同情が少なく、周圍にも亦郡立の女學校を縣立としたき者などの注文もありて、或は政略的に閉鎖を以て脅され、或は試驗場に改めよなどとの說を聽く。從つて十分の擴張を爲し得る筈も無く、實習も怠りがちなりし。今年は漁撈科の上級生を海に出し、相應の收獲あるまでは海上に居れと言つて遣りしとはあはれなこと也。簡易科を補習學校として附設して居る。爰では水産の教科書を讀本として居るはよし。受持の教師は實に珍らしい人物、五つの外國語に通じ、書物の上での水産知識甚だゆたか也。

歸りに吉岡といふ書店に寄り本を買ふ。若狹國志の出版の計畫をきく。漢文を讀み下し文に改め、伴信友翁の書入れをも併せて出版すべしといふ。

板屋市助といふ人の稚狹考十冊を見る。是こそ最も早く出版したき本なり。信友翁が東寺文書を寫して、細かく書入れしたものあり。今は酒井伯家に歸す。吉岡は其中の太良保（たらのほ）の分だけを抄出して持てりといふ。太良保は今もあり。國富村のうちなり。

信友義門雲濱三家の筆蹟を繪葉書にしたのをもらふ。

清濱館の別館に行き、三宅少佐其他の人たちと話して夕方まで遊ぶ。枇杷を買ひてたんと食ひたり。機關大尉佐久間義夫君は、戰爭中敵船パロスを横須賀の捕獲審査所へ引いて來た乘組將校の一人、今舞鶴の水雷團に在り。こゝに來て五年ぶりに逢ふ。其他信州甲州などの山國の出身將校も多く居り、共に話しつゝ晝飯を食ひ、湯に入りて夕方に歸る。

加納書記訪ひ來り、色々の事を教へてくれる。その一二、

熊川村大字河内は、本道より南へ四十町ほど入つた山間の一部落にて七十戸あり。以前

は木鞍鍬などの工人多く、何れも諸國に出でて勞作し、一昨年中外に在り、盆暮に歸り來るのみ。されば村の入口は關所を据ゑ、他所人は男子は一切入れず。女子のみ入つて來て商ひをする。時世改まつてより桑を植ゑ、次で駿河に行きて三極栽培の利を知りたる老人あり、今は專ら之を作りて年產一萬圓を超ゆ。又よく造林をなす。田といふもの少しも無くして一戸平均の年收三百二十五圓、村がらよく見に行く値あり。村に鑛泉一所あり、旅宿は差支なしといふ。

大島は今は半島なり。無論中古以後の接續なり。こゝには惡い病多しといふ外部の說あり。或は昔こゝに來て匿れしものか。滿山枇杷を栽うること、肥後湯島の無花果、安藝大崎下島の桃なども同じ。今日午後渡りて見る計畫なりしが、海荒れて海軍も演習を見合せた位なれば斷念したり。

今日午後片岡司令長官及び水雷團長森大佐に面會、敬意を表す。

夜水產學校長來る。

三宅佐久間の二君夜再び來りて元氣よく話して行く。

六月二十三日、終日雨

小濱を六時に發す。谷田部の坂を越え、南川の谷に入る。口名田・中名田・知三・奥名田の四村、總稱して名田莊といふ。遠敷郡中最も產物の多き地方なり。

久阪といふ處は知三村の中心、是より知阪を越えて丹波北桑田郡に出づ。同郡知井村の中村まで三里、周山までは七里ほどか。此邊五十町一里の慣習ありて、路の遠さしかと判らず。

名田莊一帶、女子はすべて猿袴をはく。爰では之をカルサンと謂へり。日本の地圖の上に、この山袴類の行はるゝ區域を、染めてみたらきつと面白からうと思ふ。爰ではカルサンを又三德とも謂ふ。戲れにはマツテクレともいふ。猶山形地方にてマタシャレといふが如し。遠敷一郡にても、村によつて形と材料少しづゝ異なれり。大よそ四類に分つことを得べし。熊川方面は縞もの、知三村にては麻の生地、たび〳〵水に洗へば次第に白くなり

て中々風情あり。口名田村にては是をカチンに染む。田草取る娘たち皆之を穿てり。

木谷川の上流木谷に行き、大阪の富豪杉本が經營せる杉檜の造林を見る。以前大字有の地約八百町を譲り受け、後段々に附近を買添へて、今は千町歩以上となる。しかも原價は僅かに三四千圓、是が町の資本家への一つの誘惑なりし也。三四年前から河合博士の弟德三郎氏是が技師に聘せらる。起立以來十四五年にもなるが、初期には失敗多く、固定資本既に十萬圓を越えて未だ收入は無く此頃少しづゝの間伐を始めしのみ。一町百圓以上の資本を新たに投下して、五十年後の回收を期し得ることは自分などには疑問なり。五分利としても之を放置すれば十五年足らずにて資本は倍となり、六十年すれば十六倍なり。それだけの價を生ずることは望まれず。たゞ道樂半分の紳士林業ならば、斯んな空想も一つの保養ならんも、町村の造林事業には警戒すべきことなり。大體に植ゑる時の樂觀的豫算が、屢〻不當なる生産費を忍耐せしむるなり。

此あたり、山頂の濶葉樹林は保安林なりしが、既に解除せらる。其理由を問ふに既に植林を終りたればといふなれども、植林はまだこの源頭の地に及ばず、又此邊の山は地すべり多く、十年以上の杉も根より覆つて居るのを見る。是は聊か大膽に失したる解除といふべし。

福井縣にては森林法施行の當初、先づ圖面に據つて概括的に保安林に編入し、後細かく事情を判斷して、一部づつの解除をして行く方針なりしが如く、實際又さうするよりは他は無かつた地方も多からんが、今となつて考へると請託手加減の餘地多く、政治に濫用せられる懸念少なしとせず。何とかして置かぬと折角の森林制度が役に立たざるべし。

兎に角に十年以上の杉の木の、廣々と數百町歩に亘りて栽ゑ渡される光景は心地よし。河合氏の案内にて、方々をあるきまはり飽くことを知らず。

勞銀は大部高い地方なり。七十錢といふのが普通にて、地ごしらへ一反に三人以上、補植と雪起し、即ち雪に倒れたものを引起す作業、又下草刈り等中々の人手を要するも、其代り林は立派にて畠の如し。斯樣の深山に、日本でないと見られぬ風景なり。もはや栽ゑ

さる部分は甚だ少なく、二百町歩もあらうかといふ。雪起しの必要は十二三年目までといへば、今に間伐だけにても收入超過といふ時代は來るべし。杉木は又谷一つ彼方の、丹波鶴ケ岡村にも三百町歩ほどの山を持つて居る。

木谷の奥には、北桑田郡を經て京へ通ふ小徑あり。落人など昔より來て住めりと覺しく、記錄はなけれど地名などゆかしいものが殘り居れり。山には又到る處茶を發生す。昔茶畠ありし跡かといへど、廣い區域なれば野生なるべし。明惠上人輸入の説は、實地に就いて考へるとよほど變なことなり。

檜木の大木の埋れたるを掘出してあり。五六百年は土中に在つたらしいといふ。又拔切りの細い木を磨きて、極(たるき)などにしたものを試みに作れり。

久阪の三樂亭にかへりて鮎にて晝飯、奥名田村井上(ゐかみ)の學校に寄り、南川對岸の中村の民家を眺望す。役場も遠くに見ゆ。營林主事佐藤君、奥名田村長等出て來る。村長は下村の人、長い髯あり。佐藤は犬を連れたり。其案内にて一ツ谷の國有林に入る。川には橋あれど岸まで水溢れたり。林道は昨年か始めて造りたり。山の木を伐りて足場となす。昔は山の木を運び出すなどといふことは、彼等の全く思ひも寄らぬことなりしが、近頃漸く盜伐を習ひ始むといふ。

谷深く險しくして天然の樅の木など多し。手近きあたりの雜木のみは、何度と無く伐つた跡あり。本郷村野尻の銅山などありて、燃料の需要は少額ならず。

やゝ登りて右手の山を越ゆ。頂上は丹波へ越ゆる縣道、縣道とはいへど路幅二尺ぐらゐ、郵便脚夫が通行するのみ。高い處から一望するに雨氣にて遠くは見えず。良き山なり。五百町餘もあらんか。

口阪本の人家ある所へ下る。村の共有林を部分木の契約にて、郡有林に造つて居る。よく眼に立つ所なり。區長美好茨氏の家に憩ふ。もう五時になり、まだ峠二つを越えねばならぬとて人々頻りに佗ぶる故に、終に此家に泊めてもらふことにする。仍て主人より此村の話を聽く。

口阪本と奥阪本とは以前は一村なりき。共有地は奥阪本の地内に在るもの大なる故に、其利用權を獨占するつもりで、文政年中かに分村を願ひ立てたるに、分村のみは許されて入會は元のまゝなりき。後訴訟などありて一時騒ぎたりしが、今は相談まとまり居れり。長百姓（をさひやくしやう）は十二戸あり、皆口阪本に住す。郡郡の佐分利村に大分の山を貸したるは古くよりの事也。其料として米五石、本來は村民の間に平分すべきものなれども、長百姓たち其爲の寄合と稱して、毎年十日も二十日も集つて飲み、其入費を差引けば分配すべきもの少しも無くなる。たま〳〵之を非難する者があれば、喚出して眼玉の飛出すほど叱るのが昔からの風であつたといふ。無茶なことをしたもの也。佐分利村への貸地は談判の上取戻し、今はかの村では他より別に借り、もはや昔の一つ話となつて居る故に、之を我々にもして聽かす也。

此大字などは、共有地の多分なる村の一例なり。百戸餘の部落にて二千町歩以上あり。山を荒すことなどは何とも思はず。公有の思想一體にうとし。全く多數者の私有、又は土地限りの無主地といふ考なり。植林を説くにも、他日の分配を我も人も豫想す。從つて今後の來住民よりは、澤山の加入金を徴せんとし、之を制すれば寸土も栽うべからず。山を荒廢に委するの他無し。

山村住民が自家用以上の木を採ることを許すべきか否かは、是からも大きな問題なり。許さゞれば耕地無き小民の生活を支へしむる能はず。許せば一人が多くの資本勞力を持來つて、有る限りの木を伐採することを如何ともする能はず。仍て結局は共有山は、用途に應じて幾通りにも區分する必要あるべきか。たとへば

甲、自家用薪山、各戸に割渡す、無料又は低料金

乙、秣山、肥草山、同上

丙、稼ぎ山、薪炭を賣る爲の山、運上を取る、成るべくは生産割、又は山入一回何程、

丁、立山・分割貸付・部分木たとへば三七伐、村立山、共同夫役にて栽る

斯うしてもなほ相互の侵犯はあるべく、監視決して容易ならず。結局は道德律の問題にな

るべし。

夜千田郡書記等、川に出でてあまたの鮎を得て歸る。

此家の衾は極めて硬し。家の女たち物陰より蚊帳蒲團をほうり出し、終に顏を見せず。

けふ途中口吟、

わかさ女がひたひ髪結ふくれなゐの鹿の子を見れば京ぞ戀しき

六月二十七日、日よう、雨烈しく降る

別れる者は別れ行き、佐藤營林主事案内にて、諏訪と三人山を越す。保護區員は何處に往つても皆甚だ人がよし。

奥阪本は細く長き谷、入野といふもの〻よき例なり。どこ迄も田あり、兩側は低い山、家が斷えては續き、女たち靜かに田の草を取る。田盡くれば少しの阪にてすぐ頂上なり。あなた面は少し險し。此峠眺望好しときけど、けふは雨にて海も山も見えず。佐分利村の石山といふ里に下る。爰は本郷村より丹波への往還なり、路傍の茶店に休む。腹の心地甚だよろしからず。

僅かの田の畔を行きて西の山麓は大字福谷、赤土の急な峠路、是も風景好き處と聞くのみ。頂上に佇立すれば、雨は霧となりて横に吹く。爰にて佐藤君と犬に別る。山道に下つて高濱に出づ。道の傍に苺多し、思はず採りて食ふ。

高濱は一筋に長き町なり。けふは海軍の宿舍なり、憩ふべき家無し。僅かに午飯をしたためて車にてこゝを立つ。やつとの事で諏訪技師と別る。此人は腰から上あまりにも傀偉にて、足は之を支へ得ず。山林の人には珍らしく山坂に弱し。迷惑至極なる道連にて、始終行動を牽制せられたり。

海邊清く玫瑰花咲けり。吉坂を越ゆ。路傍の小社に行人の枇杷の實を供へたるを見る。若狹は總體に昔風の國なりと思ふ。

頂上より二十九番の松尾寺、右の方に近し。國境以西は坦々たる大道、新舞鶴に入るまで髪の如く直し。新舞鶴はもとの北吸といふ地なり。道に沿へる川にて、海軍々人らしい

若者浴衣にて魚を釣る。新市街には草地なほ多し。通り抜けて停車場に入る。都市氣分薄けれどもなほ嗅ぐべし。なつかしく覺ゆ。そこで見え坊に一等に乘る。

舊舞鶴に下車。古金屋に行きて食す。此町は模範的の城下町なり。城山のめぐりは川と海と、其一角には寺もあり小社もあり、鶯が夏も啼いて居る。一方よりは大船の汽笛きこゆ。

餘部（あまるべ）の町も丘を隔てゝ彼方なり。

六月二十八日、日よう、晴、よき日

朝人力車にて爰を立つ。町にて地圖と繪葉書を買ふ。軍港に近ければ良き煙草あり。暫らく海のはたを行く。やがて由良川を渡り、その左岸をゆる〳〵と下る。此川濁流、川口二重餘の間は川尻と言はんよりは寧ろ入江なり。急に廣く靜かになりて湖樣の觀をなす。但馬の圓山川も同じ。

三莊太夫の故地といふ處を過ぐ。川中を指さして馬場の跡なりと言へり。安壽姉弟の物語を想起して、幼少なりし頃の夢のあはれをくり返す。由良の茶店に休み車を更へる。廣廣と明るい村なり。泊りの船どもの帆柱、其間によき松の木立てり。新道は海岸に沿ひて行く。すべて御影石にて、海の中なるも山のも、岩は悉く美しく、又松原あり。山の崩れたる處に、例のハゲシバリを栽ゑたり。

小寺といふ村、又小さき峠を越ゆれば與謝の海になる。道の土もすべてミカゲの砂なり。此あたり砂をマナゴといふ。

宮津の町の入口に在る水産講習所に寄り、所長の牛窪氏と語る。十年以上在任といふ。此講習所の特色は別に學科を教授せず、常に實地にてのみ練修さすること也。生徒は一科に五六人づゝ、漁撈製造の二科各一年、養殖の科のみは準備未だ成らず。戰爭中食料の罐詰を引受け、其純益の大半を以て設備を擴張す。一たび火災に遭ひ直ちに再建せり。昨年は東宮殿下の行啓を迎へ奉る。

漁業調査書を刊行す。海岸各村別にて、寫眞を多く入れ、詳細この上も無し。北に向つ

てこゝと相對する伊根村は、丹後にても漁業の特に盛んなる地なり。

郡書記山本三省君迎へに來る。明治三十六年に相樂郡にて逢ひ、農林學校へも同行した る人、井上の兄の爲に鹿背山の舊事を調べてくれしことあり。職務に忠實にして其傍歌を詠み、又古瓦を蒐集するなど、ゆかしきたしなみある人なり。大聖寺の菊池君と風格やゝ似たり。郡役所に行く。郡長田邊信成君は曾て久世郡に在り。是も三十六年に汽車中にて話をせしに、もと上伊那郡長たりしことありと言へりき。當時狐の皮のチョッキを著てありしことを憶ひ出づ。

清輝館別莊に行きて晝食す。樓上より海よく見ゆるも、橋立の松原は斜めになりて見どころ無し。

午後上宮津村の役場に行く。此村は丹波路への山口なり。山野多けれども貧村にて、耕地あまた町の人の手に移りて後に、勸業銀行と宮津銀行抵當に取り流すといふを、村の金にて買取り、實費にて元所有者、又は元の永小作權者に賣つて遣る。代價は好都合の事情にて、小作米一俵には四十圓ばかりにつきたりといふ。此邊の小作料は上田四俵（四斗二升俵）なれば、先づ一反百五六十圓までの價なり。村が中立機關となり、學校の基金などを轉用し、既に大部分を目的の如く本主に復しなほ村財産としても三千圓足らずを持つといふ。

所謂入石（いりこく）の弊は一にして足らず。故に村の田は村の者に持たするといふ努力は、決して一片感情の問題に非ず。たゞ其回收を村事業とするは、法規上の支障のみで無く、害も亦伴なひ得べし。今後は別に基金を設け、たゞ村長に管理を托するを可なりとす。此意見を村長に告げたるに、如何にもと同意せり。但し今回の事業はまだ約十分の一に過ぎず。是以上の買戻しは、現所有者銀行に非ざる故、同じやうに手輕には事行かざるべしと思はる。

往復に中學校の前を通る。此學校は兼て評判のよき學校なり。前校長山内佐太郎氏、既に千葉縣に轉任して在らず。寄りて見たかりしも時間足らず。たゞ門前より消防の練習をしてありしを見て過ぐ。

宮津町は東の端が城郭。こゝに郡衛公會堂などあり。西の山添ひは漁師町、魚商人多し。家々の壁に作り付けた大爐あり、鯖をあぶりて丹波の方へ馬で出すこと幾何といふを知らず。橋立一覽の途次之を見る。

文珠までの濱邊によき宿屋あり。田中芳男氏の別莊も此間に在り。文珠堂の門前は完全なる遊覽地、遊民常に多く、盛夏には海水浴の人群をなすといふ。參詣せずして過ぐ。切戸を渡船にて越え、松陰の路を歩す。切戸は四五間の幅にて、此方よりも小さな砂洲突き出でて重なれり。海荒るゝときは折々他の處にて切れることあり。

全體に北海は潮差小なり。此邊も五六寸に過ぎずといふ。沙嘴より内には海水十分に入らず、奥の半分は淡水に近し。仍て鰻を養殖す。牡蠣は不成功に終れり。

沙洲の突端に近き處最も幅廣し。こゝを厚松（あつまつ）といふ。根の所に行くほど狹くなる。こゝの松は以前人の力にて植ゑしこと明證あり。二百年以上も前のことかといふ。近頃虫害にて倒るゝものやゝ多し。小松は多けれども成長いかにも遲し。よつて盛んに松苗を補植して居る。以前はこゝも國有林なりしを、府に讓り受けて公園とす。公園になるまでは松の下はたゞの草村なりきといふ。今はやゝ清淨過ぎて、或は松の爲にはよくないかとも思はる。

入海を隔て、左の前手に見ゆるは府中村大字國分、國分寺今も存す。山の麓にて平地少しも無く、又往來の便宜もよからず。如何にしてこゝに國府を設けしか、訝しき地形なり。海岸には今は大分の田あれども、何れも新たなる築地（埋立）なり。山崩れ屢〻ありて、近年は小學校を潰したことさへあり、大よそ地變の頻繁なる處と見ゆ。昔の世のさまを推測すること能はず。

天の橋立は古い地名ならんも、此砂洲をいふか否かはなほ疑問なり。橋立のくらはし山などのハシは梯にて、寧ろ險岨なる所のやう也。假に斯るハシ立もありとしても、「天の」といふべき地形には非ず。何れの方角から望みても、海天の境に見ゆる處は無く、常に磯山の陰になつて居る也。

入海の東北隅に併立して、江尻溝尻の二部落あり。入海の周圍には多くの村あれど、何れも新土着なりとおぼしく、漁權は總括して溝尻村に專屬せり。其漁業組合の經費にて鰻の子を放し、又は名物金太郎鰻を外海より捕り來りて放流す。江尻も漁村なれど、是は專ら外海に出漁す。

江尻に國幣中社籠神社あり。參拜す。成相寺は是より登る也。中腹に笠松といふ處あり。茶屋を設く。行啓を機としてよき道を通じたり。所謂股倉眼鏡の名所なり。夕方になりたれば斷念して上の寺には行かず、昨日の疲れもありし也。內海と外濱とを一時に觀るには此山に登るの他無し。

成相寺は二十八番の觀世音、古き寺にて寶物多しときく。寺は東面にて今の橋立は却りて陰になりて見えず。由良の方より西北に向へる栗田の海角に、別に一箇の天橋立ありて宮津の灣を包めるが、眼の下に見ゆといふ。成相は今は寺の名となりたれど、語義は却りて砂洲の新生を意味するものにて、山下一帶の地名では無かつたかと思ふ。但し成相寺と文珠とは近世は關係全く無しといへり。とにかくに小式部內侍などの天の橋立は、この細長い海の中道のことではないのかも知れず。

東北の沖に大島小島見ゆ。又沓島冠島あり。大島は以前は二郡の交界、今は加佐郡西浦村に屬するもなほ入會なり。人家無し。鯖鳥多く棲む。近頃京阪の奸徒此島に上り鳥を捕り盡す。得る所十數萬圓、罰金を拂ひ刑に服してなほ餘利多かりしといふは淺ましき話なり。鯖鳥は土佐の島の鰹鳥と多分一つ、鷗の一種のみ。學者あまりに細かな差を言ひ立て別の名を付するなるべし。法令の煩なる今日の如くにして、なほ此等の惡者を制する能はざる也。

府中村大字小松の小松九郎右衞門翁、久しき以前より此邊の山を植栽す。其木今はよほど大きくなりしものあり。又學校林にも寄附せり。訪ひ行きて逢ひたれども、既に中風となり話些もわからず、當主は不在、この人は何もせず。次男は郡農會の副長なり。嫡孫は早稻田に在りし者なりとて笠松の土にて自ら名をのりたれども、祖父が栽ゑたる山は何れ

なるかを知らず。

田植祭なりとて村の者皆休む。當番の者金を村に納めて一人渡舟を漕ぐ。薄暮此舟をたのみて宮津に還り來る。海平かにて港の燈花の如し。清輝館の下に舟を繫ぐ。月夜なり。絃歌近くきこゆ。

今さらに旅をさびしと思ひけり清きなきさに一人遊びて

夜牛窪氏來りて緩話。この人鐵道院の平井氏の甥なるよし。

老女の按摩を賴む。越中稻光に居りし者といふ。よくあの邊のことを知る。睡き耳に色色の話をして聽かす。町は皆戸數にて記憶す。さながら統計家の如き學風なり。其話二三を控へ置く。

○某村の酒屋へ（ねむくて村の名をおぼえず）、夜酒を買ひに來りし者あり。一升德利をさし出し、酒を二斗くれよといふ。雇人馬鹿馬鹿しと思ひて言ひ爭ひてありしを、主人が聽いて、二斗はかれと言はるゝからは二斗入るならん。早くはかつて上げよといひ付けしに、果して二斗入りたり。何しに代物をたまはるべきや、又も御用を仰せ付けられよといひて歸したり。是は天狗なり。

○又某村にて村人賭博してありし處へ、天狗來り加はり頻りに打負けたり。暫く貸してくれよ。其代りに是を預けるからとて、小さな風呂敷包みを置いて行きたり。その相手の男珍らしく律義者にて、久しく之を開きても見ざりしが、後日その天狗來てそれを受取り、汝は正直者かな。この包みをあけて見ざりけりと、其褒美に小さい太鼓を、子供に與へて去る。いかにも氣味が惡ければ、その太鼓は村の神社に納めたりとて、今もまだ殘つてゐる。

○今石動の何某か家に、年々天狗が來て酒食宴飲してかへることと今も例となれり。前以て大よそ幾人樣の用意を仕るべきと伺へばしかじかと答ふ。先年のこと、この度は唯二人前にてよろしい。皆々戰地へ行きたれば斯く無人なりと答へたりといふ。（柳田附記、是とよく似た話、加賀の松任にもあれば、越中の高岡にもあり。二軒とも餡ころ餅屋なり。前

代に此家から出た天狗といふこと、夜叉ケ池の龍女も同じ也。）

○高岡の舊城の馬場に、大きな杉ありて中ほどより七本の枝を出す。天狗常に宿る。是も犬戰の年の事なり。其枝五本一夜風も無きに折れたり。町の人悅びて五大洲は倒れたり。ニホンは殘つたと謂へり。

六月二十九日、朝から雨、終日よく降る。

早朝田邊郡長宿へ見送りに來る。六時發の早船にて岩瀧まで、船中は自分たゞ一人、一時間餘りにて著く。車夫向ひに出てあり。河守（カワモリ）行の路を左にして大内峠を越ゆ。頂上から再び入海のよき景色を眺む。寫眞を取らうとすると要塞から望遠鏡で見てゐて、すぐ電話をかけるから途中で必ず逮捕せらるべしと嚇かされる。

大野を過ぎて餘部（あまるべ）、右は峰山へ行く路、左に過ぎて五箇村大字二箇にて車を更へる。こも大字の數五つあり。

比知山越にかゝる。山のつゞら折が人の臂のやうなればと思ふ者もあれど、如何あらん。野中を過ぎて久美濱に出づ。濱といへば元は船付なりしならんも、灣の口今は橋立のやうになり、切戸狹くして役に立たず。近頃費用をかけて此口を切り開く。

以前爰に、代官所あり。一たびは縣も置かれしことあり。此郡（熊野郡）は但馬の方へ入込み、北は海、南はすべて出石（いづし）郡、京都へ出るには出石を通るが近し。交通不便はとにかく、道路に付きては府の助成を得にくきやうなり。

久美濱灣の外に、旭といふ港あり。町より一里餘にて東向きの港なり。是と相對して東三四里の處に、西に向へる夕日の港あり。二港の間を日間（ひま）ケ浦といふ。

警察に立寄り荷持の人夫の世話を賴む。その向側が郵便局にて、局長織田幾次郎、樓を陳列場として、さま〳〵の古物を集め居れり。山本郡書記の勸めもあれば行きて觀る。好事無類の地方學者なり。土器石器珍らしいもの多し。久美濱灣頭の砂洲には古墳少なからず。石器類も亦同じ處より出づ。又多量の古錢を堀り出せしことあり。古い土着の地なりとおもはる。古墳土器と石器時代の土器と併出する土地は、織田君幾つかの例を知ると云ふ。

へり。

三原峠を越ゆ。丹後と但馬との國境なり。雨はげし。今一つの小さき峠ありて、いよいよ圓山川の下流に出づ。此あたりの川幅廣く、まさに一つの長い潟なり。湯島（城崎溫泉）は山間なれども、一面は又水鄕の趣あり。

雨中の水の上は寂しきもの也。波たぶ〳〵として舟を搖かす。是より外側をササノウラといふ。樂々浦と書く。古名なり。

三木屋といふは昔風の湯宿なり。庭古く相對して山あり。たゞ其下を汽車が拔けて行かうとするのが困りもの也。是からさきには日本一のトンネル有りと聽きしはまちがひ歟。

（附記、珍らしく長い陸橋あり、そのことをいひしならん）

六月三十日、晴、夜降る。

腹のこゝち大いに惡しければ、療治のつもりにて逗留す。おくれたる日記を付ける。

櫻井勉氏が明治二十六年頃に增補刊行せる但馬考、其祖父の著なり。宿の主人の世話にて借りて覽る。この人は今此町の町長。

アナトル、フランスのバルタザルも一讀し了る。

理髮に行く。ふけ雪の如し。

大田垣氏に行き診察を乞ふ。この人松岡の兄の同窓。なつかしがりて昔を談る。夜又訪ひ來りて十二時まで話。この人の長男今年十六、四年ほど前に本を綴ぢる鋏を呑み、それが氣管の方に行きたりと見えて、今も呼吸器が惡く、折々は熱を出すといふ。まことに親の愁ひはさま〳〵也。

御所の湯筋向ひなれば入る。又曼陀羅湯といふにも行きて浴す。

七月一日

けふも逗留、讀書と按摩。二階の客の所へ行き半日碁を打つ。大阪の人らしくまことに下品なり。少しく無事に苦しむ。旅に倦みたる形なり。

七月二日、折々小雨

朝御所ノ湯にて話をまじへた男三人。一人は早稲田にて世話になつたといふ神戸の者、顔も名も覺えて居らず。他の二人は同行にて、兵庫縣の耕地整理技師池田泰次郎と、他は埼玉縣の岡本技手、この二人は此地に來て袂を分つなり。その池田に伴なひて自分も城崎を出發す。

圓山川の左岸を上る。田鶴野といふ村に、ポンプにて水を揚げる機械場路ばたに在り。七十町歩ほどの耕地整理に伴なふもの也。如法の水入場でありながら、平日は田の水得かたし。川との差六尺ばかりといふ。此村對岸に役場あり。橋無し。村長は毎日渡船にて出勤とはやゝ珍らし。

玄武洞はこの少し川下に在りて川を隔つ。入口の石切場、街道より遙かに見ゆ。いはゆる玄武岩を斫り出して其まゝ利用したるもの多く、豐岡には專門の商人あり。今憶ひ出せば自分の生れた村でも、夙く此石を使つて居たの也。たとへば吉田の井上の石がけにもあつたかと思ふ。

圓山川は川尻三四里が間、先づ豐岡から下は入江の形なり。水深く緩く、川幅が急に廣くなり、此邊では信濃川にも劣らず。樂々浦は是に續ける地名なり。

城崎郡も湯島まで下ればもう水害無し。その少しく上流までは、水しば〳〵堤を越ゆ。激しき害は無くとも、年毎に田を覆沒せしめて、稻を腐らすこと多し、杞柳の栽培はよく考へたもの也。豐岡に近づくほどヤナギを植ゑし畠多く、なほ水上にても見られる。

豐岡はまさしく堤の上の町なり。新たに家を造るには屋敷地取の爲に大部分の費用を取られる。家の後はすべて石垣、家々競ひて地盤を上ぐるにより、相隣して高低著しく、一見其新舊を知り得べし。町は必ずしも衰へざれども、家の新たに加はるものまことに少なし。年に一戸か二戸のみといふ。

この七月十日より、豐岡まで汽車が開通する。鐵道も成るだけ用心して山の裾を通り、自他の損害を避けんと努め、停車場なども現に町から十數町、不便な山の下に置かれて豐岡と名のる。しかもそれへ通ふ人力車道の爲にも、或は水の害を多くするかと患へられて

ゐる。この邊平地の道路は何れも置土の作業に大へんな金がかゝるよし也。

柳行李は耕作者が村々で編み上げ、町へ出して緣を付けて賣り出す。即ち町村二種の勞力を配合するが常なれど、商人によつては村より半製品を買入れて其まゝ賣るもあり。官之を制すれども省みず。或は原料の柳を他處より送り來るものあり。此町より原料として出すものあり。半製品のまゝで積出す者ある一方に、他所より半製品の仕上げを持込む者もあり。をかしい程小商人の思はくはさま〳〵也。

豐岡にて城崎郡役所を訪ひ郡長に面會す。この人明治二十四年の頃、群馬縣にて郡長をして居て逢つたことあり。爰にて晝の辨當をつかふ。此町の東端に東條といふ部落は特殊のもの住む。多くの小家かたまりて列を爲さず。

出石へ行く。道に小坂村の役場により、耕地整理を一見す。郡吏田中出迎へ。

出石神社に參拜す。此御社は山の下なるに、何故か山を後にせずして其右側に山と並べり。以前より此の如しといふ。

出石は靜かなる町なり。峠はあれど奥の谷廣く、丹波へ通ふ路幾つもあり。丹後の熊野郡は西と南すべて兵庫縣と接し、府廳へ出るにも此郡を通りて行く。山道の交通今もなほ不便なり。

玉井屋といふに泊る。夜出石神社の宮司來訪、司法書記宮谷野格君叔父、もと郡長なり。芝居小屋が旅館の隣に在り。囃子の聲手に取るが如く聞える。

七月三日、曇、小雨

朝出石を立つ。鶴山の下を過ぐ。鶴の子は三四日前より飛び習ひ、けふは雨の靑田の中に親と共に求食す。親子計六羽、車上歌あり。

つる山の鶴は巢立ちて遊ぶなり家なる稚兒を思ひこそやれ

淺間峠を越ゆ。八鹿（やうか）の停車場にて汽車に乘る。此川筋、川のみ廣く谷は細いもの也。ところ〳〵少しのふくらみありてそこに停車場あり。和田山は何故こゝを分岐點にしたか不明。

竹田は昔しのばるゝ町、民居は山の裾をめぐり、城の石垣は山上に在り。出石も町を壓して高い山あり。今國有林にして樹繁し。是は頂上に城を築かんとして果さず。麓に領主の館の跡あり。

生野(いくの)に下車、眞繼氏の隣家なる濱屋といふ宿屋の主人に案内を頼み、陶庵翁の墓を展す。陶庵居士埋骨之處といふ石碑あり。十六年前の七月、靜雄と共に詣でしことあり。當時の眞繼一到翁も墓を隣して永く眠れり。寺は日蓮宗本行寺といふ。大俗物、しかも二ケ月ほど前に火災に遭ひ、其跡淺ましくも荒れたり。

陶庵居士は予が生まれし日より滿一年前の八月一日に歿すと聽きしが、墓石は明治七年八月三日とあり。予は性質も容貌も共に此翁に似たるかと思はる。懐かしさに堪へず。

次の汽車にて福崎にて下車。辻川は全國中にも珍らしい好山川なり。殊に岡の上からの眺望は繪にも寫し難き感じ也。家の屋根の形と勾配、ともに他の地方に優るかと思ふ。但馬境の山々、暫く見ぬうち夥しく杉を栽ゑたり。是もやがてよき山里となるべし。

駒ケ岩は市川の瀨に埋れて、頭のみ見ゆるやうになれり。古い記憶の無い者には見出すこと能はず。夾竹桃が非常に多くなつて居る。二十五年前には在りしや否や、殆と記憶に存せず。多分は須磨明石の別莊に栽ゑ始めしより流行せしものならん。然らば是も一つの西洋かぶれなり。

氏神社に參る。老木のヤマモモ依然たり。予が鄕を出づる以前、村の男の兒に何次と名づくること非常にはやりしことあり。この拜殿に憩ふとき、測らずもその何次の一人に逢ふ。今は神戸に在つて大工なり。この男と話しつゝ山に登つて四望す、心持が妙に柔かになる。

熊野神社に詣で次で其隣の圓乘寺の墓所に行く。松岡三子之碑といふ小石塔が我が家最も貧乏なりし時に建てたるものなり。

三木家を訪ふ。少年の頃によく世話になつたる老刀自は、この三月に世を去りたまへりと聽きて、胸を打つ。引留められて今夜は爰に泊ることゝなる。三木君には女の子三人男

一人有り、臺所と湯殿とが改造せられ、小兒が入り替りたるだけの昔のまゝの家なり。自分と同じ年頃の娘たちは、寫眞を見ると皆堂々たるマダムとなり、その一人にも逢ふことと能はず。

再び岡に登つて、遠近の村里溜池などを望見す。自分の生れし家はカケアガリといふ坂の上に引移されて屋根見ゆ。其隣は天理教會、是もいはゆる劉郎去後のもの、獨り水蜜桃の果樹園のみに非ず。

北萬ともいひ又菓子屋ともいひし大雜貨店今は無く、其跡が畠となり、家並切れて齒の抜けたるが如し。其向ひの龜坪屋といふ金物店も退轉せり。

曾てエナガの巣を見付けたりし松の木はとくに伐られ、其附近は三木氏の桃畠となる。鳥の巣さがしの舊仲間、干鰯屋の寅吉も立派な親爺となり、驛の前に店を出して居るといふ。

郡長前川氏及び田崎五百穎氏と〻へ訪ひ來り、食事を共にす。田崎老は古くからの歌人、今記憶する所の二三章を吟ずるに、東京ならば優に名流と伍すべき人也。

七月四日、晴

吉田の井上氏へ行く。路に榎木屋の榊吉老に逢ふ。鈴木純爾の養父。

井上の老刀自は上京して不在、山口君夫婦と話す。酒のすきな尼妙香の居たる安德庵、今瓦葺きに建替への最中なり。

昨日と同じ汽車にて姫路に行き、安東氏に落着く。家書に接し松浦先生大病のよしを聽き驚く。

夜總社の社務所に行き、父の友庭山武正翁に逢ひ、燈下に舊を談る。見えざること既に二十三年なり。

七月五日、雨

神戸行。武岡を訪ふ不在。縣廳に行き服部知事不破部長、又一昨々日の池田君などに逢ふ。武岡と魚善にて晝食、先生の病狀を尋ねる。明日は宍粟佐用をあるいて見る所存なり

しを、見合せて歸京することにきめる。

大阪へ行き、中ノ島の銀行集會所にて今村に逢ふ。又吉田といふ男にも。

七時の汽車にて再び姫路へ引返す。

七月六日、晴

安東氏の二階にて安臥、汽車に乘りおくれし也。

七月七日、折々雨、

八時出發、京都へ、車中森田茂吉氏に逢ふ。電車にて府廳に行く。知事及び昌谷君に逢ふ。烈しき下痢始まる。押して小林區署に行く。署長不在。

神戸正雄君を訪ふ。東山を軒に入れたる好き二階なり。話をして居て穏かで親切な人哉と思ふ。又河上肇君の家にも行く。是も腹を病み寢て居る。枕元にて話をしてかへる。

南君を訪ふ。今苦闘の最屯といふ。夜遅くまで話。送られて十二時の夜汽車に乘らんとす。途中寺町の通りにて白鳥集を購ひ、又京極の町を歩む。雨中なれども往來しげく、車の通行を禁ず。

汽車の中にて大いに惱む。

七月八日、晴

午後二時漸く家に還る。

床の中にて諸方の手紙を見る。けふは生母の忌日なり。

美濃越前往復

——明治四十四年——

七月七日　金よう

昨夕九時の汽車にて、新橋を立つ。二宮德君同行。この人尊德翁の曾孫なり。

早朝岐阜に着き、玉井屋に宿を取り、直ぐに縣廳に行く。薄知事は仙臺にて既に知り、石橋松村二部長は同窓なり。江崎黑澤の二技師は始めて逢ふ。夜分訪ひ來る。

先づ物產館に入りて見る。紙は市と武儀郡との出品多し。中央製紙株式會社といふは、惠那郡に工場あり。御料林と共附近の針葉樹を利用して自らパルプを作る。又繿縷を利用す。輸出用マッチ用紙、藍色のもの一連一圓二十錢、綠色のもの同二圓、どうして是ほど

の價の差あるかわからず。二尺四方のもの五百枚が一連なり。此會社の主たる製品は所謂ロール半紙、原料は木材、ツガ・マツなど。ボロは新聞紙以外にはあまり使はず。書院紙にもパルプを使ふ。此パルプは獨逸からの輸入品なり。最上品でも一割はこのパルプを入れ、粗なるものは半分も入れるといふ。其理由は競爭に在り。つまり他府縣より安いものを出さうとして此の如し。

縣内の原料は甚だ足らず。他府縣の移入多し。楮は東西諸國より來る。那須物と備後物を上品とす。三椏は土佐より取寄せるが、土佐で自ら使ふものよりは材料遙かに悪し、かの縣にては良きものを出さぬ考へらしいといふ。仲買はこちらの者、地元に出かけて取引す。此縣の紙産地は、地少なく人多くして耕地を得がたし。非製紙地にては此物の栽培に冷淡なり。勞力多くして材料乏しき爲、材料費を節約して勞力を以て之に代へんとする傾きあり。たとへば蛇目傘は粗薄の紙に墨を塗り糊を附け、一見丈夫に見する故に、色漉きの紙を用ゐて勞力を省かしめんとするも事行はれず。粗製濫造は、要するに競爭の激しい時代には、之を生産者に責むること能はず。

柳行李は本巣安八の二郡に生産者多し。蔓細工の外を樺の皮に包みたる小さい炭取など、形も色も最も古雅なり。郡上八幡の水野某出品す。彼地に行きたる時尋ねて見たし。この外に木彫玩具などのちよつと面白いものあれども、物産というてよいか否かは容易にきめ難し。

縣の藏書目錄を見る。この中には高山人の見せたる飛驒の書は殆と皆見えず。

檀鵠三卷。是は飛驒村方舊記なり。近年の傳寫本なれども精確なり。檀はシラマユミ、即ち飛驒國の枕言葉なるべしと、神谷氏の題言に見ゆ。神谷は美濃志の著者、明治十一年の頃、縣廳に勤務せし學者なり。

塘叢二十卷、是は自筆本と見えて餘白多く殘れり。有りふれたる古書の抄錄なり。文政四年の自序に立塘といふ名見ゆ。第七卷の表紙に、潛藏國書といふ紙の札を貼りてあり。是亦神谷氏の家藏の記にや。荏野冊子、こゝには四卷あり。田中大秀著。